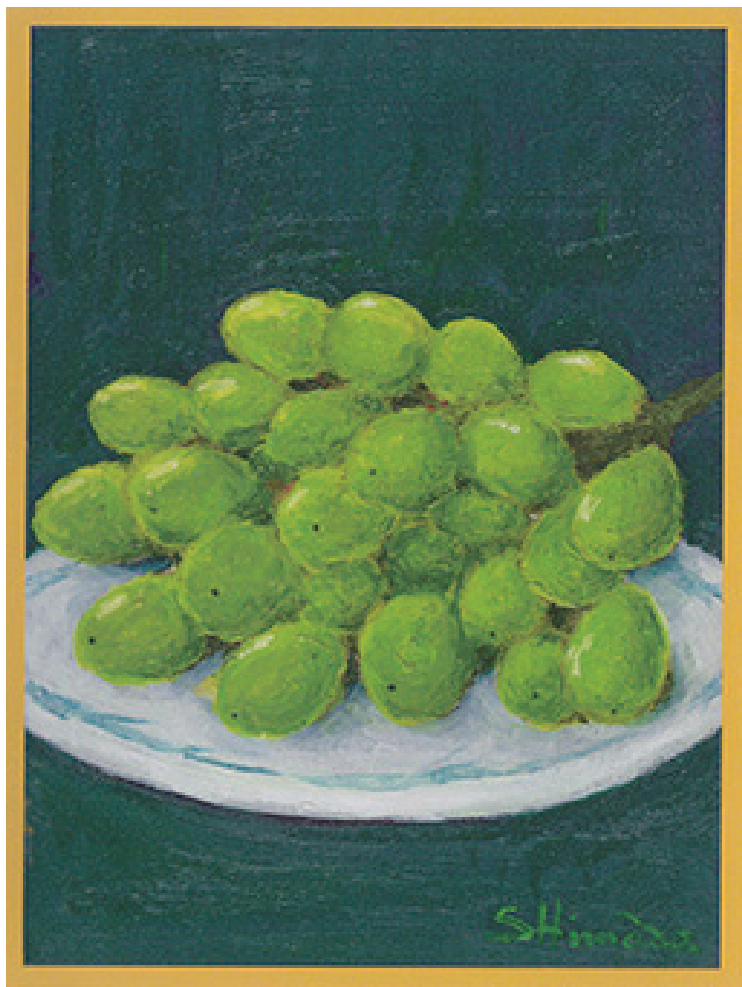


冬 雷

短歌雑誌

TOURAI

二〇二六年十月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十五卷第十号（通卷七七六号）



10月号・2026年

応接室……新作五首

闘ひの日より

林田恒浩



ホルムスクの空に飛びかふ鳥たちよはらからの死を惜しむごと鳴く

痩せこけて眼ばかりひかる若き父 かの日サ
ハリンより還りきたりき

波のごと国境をこえゆく戦車隊 昭和二十年
八月 ふるさと真岡

母の胸にいだかれて見たる海の色 闘ひの日
より過ぎし八十年やそとせ

クリオネと姿をかへていまいちど還りゆきた
きふるさとがある

〈星雲代表〉

2026 年 10 月 目次

〈応接室……新作五首〉……………	林田恒浩…
電子書籍『冬雷』を国会図書館に納入……………	桜井美保子… 1
冬雷集……………	2
作品一……………	20
十月集……………	36
作品二……………	44
作品三……………	54
八月号冬雷集評……………	桜井美保子… 17
作家と机の話（『書斎の宇宙』から）……………	高橋輝次… 18
八月号作品一評……………	小林芳枝・藤田夏見… 34
八月集評……………	鈴木やよい… 40
八月号十首選（冬雷集・八月集）……………	41
八月号作品二評……………	井上菅子・江波戸愛子… 42
八月号作品三評……………	山本三男・橘 美千代… 52
村上咲枝歌集『石鎚山』を読む……………	小林芳枝… 60
大友柳太郎歌集『渚』鑑賞 補記⑦……………	大山敏夫… 62
八月号十首選（作品一・作品二・作品三）……………	63
歌集 / 歌書御礼……………	編集室・佐藤靖子… 64

電子書籍『冬雷』を

国会図書館に納入

桜井美保子

◇「デジタルコレクション」

冬雷では毎月紙媒体の雑誌を発行するとともにホームページにて同じ内容のものをPDF版にて掲載している。今まではホームページで公開ということを主にしてきたが、最近になってこのような電子書籍を収集して管理、保存、運用を行ってくれる公的機関があることを大山編集長からの情報で知った。その窓口は国立国会図書館内にあり、資料公開の場合は「デジタルコレクション」である。

編集長と相談して『冬雷』納入の方向で進めることになった。そして本年六月下旬に「オンライン資料収集」の窓口に申し込み文書を送信。数日後に「オンライン資料収集」担当の方より『冬雷』が収集対象の資料であることを確認したので準備が出来次第、収集するとの連絡を受けた。冬雷ホームページで最新号掲載

の都度、連絡したり、そのデータを送る必要はなく国会図書館側で冬雷のウェブサイトにアクセスし、定期的に自動収集してくれるそう。これは大変に有り難いことである。

さて電子書籍『冬雷』は、いつ頃国会図書館「デジタルコレクション」で公開されるのだろうか。そして、それを確認する時の検索方法はどうか。八月に入ってからそんなことを考えたので「オンライン資料収集」の窓口にお問い合わせしてみた。すぐに担当の方から丁寧な返信が送られてきた。

それによると現在、冬雷のWebサイトより定期的に『冬雷』を自動収集・保存していること、公開については多数の資料が集まっているため、数ヶ月から半年かかるということだった。検索で『冬雷』を見つけるには「デジタルコレクション」トップページの最上部の検索ボックスでも、ページ中ほどの「コレクション」一覧から「電子書籍・電子雑誌」の検索ボックスでも、どちらでもよく、「キー

ワード」でなく「タイトル」に「冬雷」と入力すればよいとのこと。そんなわけで、この原稿を書いている現在では未公開。公開されるようになればまた、会員の皆様には報告したい。

◇国会図書館の利用

国立というだけに国会図書館には多くの蔵書がある。利用については各資料によつて違うのだが、ログインしなくてもインターネットで閲覧できるもの、国会図書館内限定で読めるもの、送信サービスを受けて読めるものなどがある。国会図書館のWebサイトにて利用者登録をすると送信サービスが受けられるので便利である。その場合読みたい本を検索して探し、書名のところをクリックするだけで、すぐに画面にデジタル化された本が現れる。「電子書籍・電子雑誌」の資料はログインなしで閲覧可能のものが多く、「デジタルコレクション」において『冬雷』はインターネット公開を許諾。電子書籍として新たな一歩を踏み出した。

冬雷集

DTP

大山 敏 夫 埼玉

原稿を^{インデザイン}InDesignにて書く作家京極夏彦氏の手袋の手は

京極氏の手甲の手の大寫しDTP独学せし頃の雑誌に

吾にむかひ勝ち組ですねと言ひし男ありきいま何処にゐて嘆きゐむ

俺を勝ち組なんて言ふにはどれくらゐ自分を嘆き貶めゐるしか

ハナ、アタマ、クビ差に決まる勝負は競走馬の話人間は違ふ

DTPエキスパート資格得るにさへ容易ならざりき現場のわれら

楽をして気楽にとうたふ植木^{うゑき}等その時代遙かわが十代遙か

現場去り過ぎし十五年もうすつかりもうもうとして年金暮らし

退職後の十五年いつときも休まずに続けたるDTPだけはまともか

赤間 洋子 東京

教へ子の還暦記念のクラス会我が家の近くで三十名ほど参加

悪さして我を悩ませた男生徒終始無言でビール飲みゐる

ロシアより一時帰国の男生徒に合せて集まり座が盛り上がる

卒業後欠かさず年賀状くれる男生徒三人目の孫誕生といふ

在学中おとなしかった女生徒は名を思ひ出せず謝るばかり

会果てても名残惜しげに生徒達マンションの入り口までゾロゾロと来る

元氣でと握手求める男子居てその時の写真送られてくる

姫路に住む卒業生よりクラス会に出席できぬと手紙が届く

ロシア土産のマトリョーシカは冬雷大会記念盾の隣に飾る

兼目 久 栃木

教員になりて初年度全教科教へると校長言ひたり

台風の日本海により関東地方を夜は突風の声大あばれする

ぶつけて硯のはじをこはしたりしまつたと思ひ茫然とする

すつた墨が一晩の内に蒸発して厳しき暑さの35℃を示す

濃くすつて徐々に薄めたり硯のなかの墨のほどよき濃さになるまで

森 藤 ふ み 東京

連日の暑さに足の遠退ける木場公園の花ばな思ふ

生協の配達員が冷凍の品は全部欠品ですと言ふ

完熟の桃の実二つ手に持ちて大きい方を娘のくれる

手のひらに重き桃の実皮剥けば汁の滴る甘きをすする

家前の工場も長き夏休みシャッターカーテン閉ざして静か

くじ引の外れを引いたやうな日なり雨に降られて干し物濡れて

冬の花と思ひてをりしシクラメン夏の最中に蕾の育つ

シクラメンの葉の隙間より茎伸びて八月一日花ひとつ咲く

等々力溪谷

櫻井 一江 東京

保育園のママ友達と子ら連れてバスにて行きし等々力溪谷

あの頃のバス乗り場は道路の真ん中にどんと構へゐし東京駅南口
等々力の入口看板見し子らは「わあトロキだ」と一気に降りき

其々の持寄り弁当広げしは等々力不動尊の境内の片隅

懐かしさ辿るつもりの方々等々力溪谷なんと異国人の多さに驚く

湧き水の川の流れは緩やかに浅きに遊ぶ光景変らず

溪谷の環境改善されし跡丸太や石のむき出しに納得

二十三区内唯一の溪谷を再生す世田谷区民と行政の在り方

遊歩道の処どころの斜面より滲み出る湧水ひかりを放ち

有泉泰 子☆ 山梨

暑き日々ただただ家に籠りおり庭の水やり草花と話しぬ

水まけば庭の花々背をのばす我も負けずにピンとせり

わが歩き見兼ねて買物喜々として俺の出番と自転車こぐ夫

久しぶり青空の下に富士を見る列なし登る人、人、人よ

友と二人登りし富士山そのままにリンと立ちおり客を迎えて

もう一度登りたいとの望みなく若き日の己の姿見ており

青木 初子 神奈川

降る雨に庭土流れ出でぬやう草は抜かざり低く刈るのみ

ドクダミの根は細けれど積みである石垣崩す力持ちある

夏過ぎには枯れて庭より姿消すドクダミなれど外見に悪し

二本つつ植ゑたる茄子とピーマンの育ちよろしく独りに多し

接ぎ木苗の丸ナスの皮硬ければ糠味噌漬けには不向きと知りぬ

生食は苦手のピーマン節ぶしに小き実数多喜べぬなり

中村 晴美 茨城

茨城に初めて台風上陸す倒木停電六時間続く

ランタンを窓辺に置いて停電の暗きリビング点灯待てり

停電にエアコン止まり蒸し暑し少し窓開くる外は暴風

冷蔵庫へポータブル電源繋ぐるも三時間で切れ停電続く

次は千葉豪雨の続く映像の夕から夜へ勢ひ止まらぬ

朝迎え千葉の映像水浸し車も家も泥水に沈む

大型のポータブル電源届く盆注文してから三日で届く

ネコノヒゲ一輪のみが白く咲く乾いた庭の茂みの中に

山口 嵩 福島

白みゆく空に高まる蟬のこゑ諸行無常の響にも似て

仰向けの蟬に列なす蟻の道せはしき動きに暑さいろあす

鳴きしきる蟬のいつとき静まりてテレビの音声瞬時高まる

夕立の去りて高まる蟬のこゑ日盛りの暑さたちまち戻れり
敗戦後八十一年経たる今「男系継承」狼煙のごとく
捻ぢ曲げた「皇室の伝統」主張する与党は何を目論見ゐるや
神話まで持ち出しとほす誰がために「典範改正」迷へる羊

橋本文子 鳥取

大賀蓮古代からなるうす紅たぐひ稀なる美しさあり
池の面の古き板橋囲み咲く濃きうすき紅あまたそろへり
小鳥の声奥の森から聞こえゐて池の静かな水音に和す
蟬しぐれひとときは高く響きをり蓮のつぼみに塩辛蜻蛉
大輪の蓮をめざすか雨蛙巨大な葉上すすみゆくなり
一人観る若き女性も静々と蓮池めぐりカメラを向ける

歌習い

酒向陸 江☆東京

八十歳知力体力気力まで衰え目に見え立ち止りたり
縁ありて仏教讃歌のコーラスに己を慰め再起を目指す
日曜は若きに交じりコーラスへ透き通る声に耳澄ましつつ
二時間のコーラス終えてぐったりと歌うというも体力消耗
声帯の筋肉疲労と整体師首の痛みに全身ほぐす
若き等と並びて歌える喜びに混声四部の響きの美し
合唱祭観客の中の友たちに交りて兄の笑顔ありたり

天野克彦 大阪

大阪に帰りて早も三年経つ遠き連山秩父を想ふ
大阪のうつりかはりが哀しくて育ちし街へ行くことはなし
おもひでは白雲うかぶ遠山を野の果てに見るごときかなしさ
語るとは人偲ぶことしき鳴ける木立の下に蟬を聞きゐつ
むくむくと湧く夏雲の生駒山この平安を良しと見てゐつ
拾ひたる蟬のしかばね美しと机に置きぬ絵に写さんと
夜半に醒めたばこを一服くゆらしぬよからぬ夢を振り払はんと
盛り上がる青葉の奥の蟬のこゑ窓を開けばわつと寄せ来る
茄子焼いて生姜を添へて食はんとす食欲なければ一品でよし

高松 美智子☆ 栃木

腹の底に「ズン」と轟く爆発音弾けてこぼれる打ち上げ花火
とりどりの色とかたち目と耳に腹に愉しむ花火師の熟練
梅雨なかの蒸し暑き曇天切り裂きて今年初めて蟬の声聞く
一周忌の読経を終えたる住職が振り向きてねぎらう介護の日々を
七本の塔婆があがり蟬しぐれ線香つぎつぎと姑の法事
ひざ丈の水を蹴散らし駆けめぐる五歳の笑顔が夏を楽しむ
刈りてなお夏草の勢い衰えずフェンスを超えてわがバラに絡む
節高く皺深き指は日に焼けて生涯現役と菜を刻む母

「雑用」と一括りにして来たが今大事な用事この回覧板

高齢者実態調査に出る前に急ぎ拭き取る緑のマニキュア

「長生きしてたと税金納めてや」市長のジョークに長老は笑む

辛さうに歩く人車椅子の人それでも賑やか骨クリニツク

右ひだり大きく揺れて歩く人の返事しつかと診察室へ

踏切の音聞こえて佐野線の二両電車とわれ並走す

玉ネギと練り辛子抜きポテサラを届けて吾は全部入りを食む

一匹の蚊に大騒ぎする児の前ばちんと手合はせ無言の解決

大塚 亮子 東京

夏来ればいつも我が家の台所大きな西瓜の転がりてをり

西瓜売りの声聞きつけて母の買ふ西瓜を冷やす井戸水酌みて

鹽の西瓜冷たくなれよと井戸の水幾度汲みて鹽を満たす

西瓜切る母の手元を見つめをり真つ赤に熟れたる西瓜に拍手

あら塩を少し振りかけ齧り付く家族で食みし頃の懐かし

二つの西瓜食べ終へ山となる皮を後始末する母を手伝ふ

買ふ西瓜今は半分、四半分大きな一玉買ひて食べたし

我が家でも家族四人で大玉西瓜食みたる頃の懐かしかりき

大勢で食べる美味しさ楽しさを夫は知らず一人つ子なれば

ミニトマト

嶋田 正之 埼玉

記憶力の低下もとより思考力弱くなりたる己を認む

歌を詠む力のいつまでつづくやら時折不安ふと通りゆく

秋季展出品作に岩塊をF百号に描きすすむ日々

会場に飾りたる折来客の批評如何にと想ひ巡らす

絵を描く意欲も同時に弱りゆきかくして人生寂しくなるや

退院をすれども身体に力なく立ち向かふ気の弱体を知る

ホホヅキの実ほどのトマトふたつ持ち玄関にくる近所の姉妹

二人して育て実れるミニトマト初なり持ち来る小さき手のひら

買ひ置きアイスクリーム手渡せばスキップをして帰りゆきたる

江波戸 愛子 ☆ 埼玉

一軒の跡地に三階建て二棟建ちたり我が家の右に左に

住宅に囲まれている小公園草の茂りて子の姿なし

除草剤禁止の公園手作りの除草剤を撒きしことあり

手作りの除草剤の効果あれど原料高値に多くを作れず

月一度食事会ありデイスービス休みて参加と友は笑顔に

近隣の月に一度の食事会中止となりぬ暑さに負けて

この年も盆棚ととのえちちはの写し絵並べて話しかけたり

父と母迎えはこの頃長の子に運転頼み霊園にゆく

父母の位牌並べて灯す盆提灯やさしい光にふたりを照らす

橘 美千代 新潟

歯の生えてきたるをさな児抱きつきて囁むとふわれも囁まれてみたし
はいはいし近寄りきたるをさな児に顔引つ搔かれ猫目をみはる

つかまり立ちして歩む孫その母と目があひ笑ふ愛着の芽生え

手をひろぐるわれに向かひて歩みくる初めての数歩孫を抱きとむ

電子カルテにキーボードとマウス接続し「手伝ひます」と事務スタッフは

皮膚科混むも診療時間内に終りカルテ打ち込み補助は定着

盆まぢか花求めきて迷ひなく菊を選ぶ母われは向日葵

亡き猫の写真に向かひたちまちに身ぬち枯野の風吹き抜ける

ブレイクあずさ☆ カナダ

ことごとく音色も景色も変わりたり一首の短歌英訳されて

病院の待合室の暇つぶし呼ばれる名前の言語圏当て

二度三度言い直しつつナース呼ぶ「エイズーザ」そうか私のことか

細く細く歌う声あり病院の仕切りの向こうに横たわる人

鳥の声ひとつだになき巨木群むごき乾きにじっと耐えおり

手のひらの小さき小鳥の小さき肺たちまち満たす PM2.5

被爆者のふり絞る声に顔しかめたため息をつく人を首相と

戦争をそれほどまでにしたいらし歴史に学ばぬ愚かな人は

目に映る命のなべて愛しかり破壊されゆくこの惑星の

鈴 木 やよい 東京

池を覆ひ生ひ茂りたる蓮の葉の勢ひのなかに花の静まる

炎天に水面動かぬボート池スワンがずらり暇さうに並ぶ

間近にて轟く音を聞きたくて暑きなか行く花火会場

煌めきの瞬間過ぎて落ちてゆく花火のかけらはふつと消え入る

腰かばふ夫と吾を追ひ越して花火の観客ざわめきて帰る

寝付けずにゆつくり始めるストレッチ降りくる雨は音やはらかし

髪を切り次の予定は写真展盆の都心を迷ひつつ行く

薄暗き土手近くにて開店のコンビニそこだけ光に溢る

野 村 灑 子 千葉

日本にも慣れて働くインドネシアの人々は皆規則を守る

二つの乳房ゆさゆささせて関取らは四つに組み土俵にころがる

四股名はいかにも強き力士なるがコロリと投げらる土俵の土に

いろいろな年代層にて考へ方ちがふ人等がひと室にをり

ごちそう様と終りたる年配の女のひと茶碗にひつつき残すめし粒

インドネシアから派遣の人等は二階にも三階にもゐて皆よく働く

中 村 哲 也 宮城

児童らは夏休みとなり鈴鳴らず朝の歩行者めつきりと減る

学生ら乗らぬ電車は日毎朝毎遅るる事無く定刻に発つ
 学生が夏休みとなる地下鉄に部活なるかな制服姿
 仙台の七夕祭りの風物詩浴衣姿は電車に少なし
 蒸し暑き夜の小高き坂途上花火見物僅かに三人
 入場を待ちたる少女ら群を為し歩道の両脇華やぎゐたり
 2・5次元アイドルといふらしも内容までは調べず終はる

田 端 五百子 岩手

大漁旗なびかせ漁船接岸す前歯欠く漁師の潮吹く笑顔
 投網打つ友持ち来たるはしり鮎初夏の味と舌つづみ打つ
 杖をもて靴を引き寄せ「それでは」と猛暑の中へ一歩踏み出す
 陽陰選りリュックの旅人扇風器あびつつ氷菓子なめなめ歩む
 後先になりて階追ひきたる蝶は茅の輪を先だちくぐる
 切岸に咲き居る山百合みづからの重さにしなひ香を放ちをり

飯 塚 澄 子 東京

隅田川の花火の絵はがき見つけたり大会近き書架の一隅
 土曜の午後詩吟教室終へて乗るバス混む花火大会の夕べ
 浴衣姿の若き女性ら美しき髪飾りもして花火見に乗る
 浅草でバス降りる人どつとあり上野へ向かふ車の静か
 墨田区で生まれ育ちて台東区で生涯過ごす我が身思ひぬ

隅田川花火をテレビにて観つつ毎年一人静かに楽しむ
 打ち上げは約二万発堪能せし九十二万人と今朝の新聞
 絵はがきの花火の空のごときかな見事な写真の新聞の記事

飯 嶋 久 子☆ 茨城

リフォームせし紬のコート気になるかすれちがう人声かけくるる
 晩年の母仕立てたる紬の着物リフォームせしコートの出番の多し
 旅先に求めたる異国の絵葉書を無沙汰重ねる友へ送る
 複雑な思いにてきく路線伸長花の季のみ混雑なるを
 恒例のフェスティバルのにぎわいが補聴器通しひびきくるなり
 東北の夏はねぶた竿灯たなばたと二人ではしごの夜思ひ出す

山 本 三 男☆ 群馬

十回は読んだらうか円朝の「牡丹灯籠」夏にまた読む
 名人の円朝語るそのままだ速記の技で伝わりてくる
 悩ましき真夏の午後に冷房の効きたる部屋で怪談を読む
 上流は雨の降るらし水濁り流れの速き川面の見ゆ
 雷鳴は聞こえたれども雨降らず炎暑の庭の土乾きおり
 コンビニの冷やし中華を二つ買い妻との昼食これで済ませる
 夕立ちの激しき雨の降りたれどアゲハの卵は葉より離れず
 台風の前は小降りになりていて雨漏りなきを幸いとする

絶え間なく雨音聞こゆるこの部屋に階下よりする生活の音

江 藤 ひさ子 大分

大合唱といふがのボリューム早朝の庭に鳴く蟬吾を目覚ます
見掛けざる蝶が群れ飛ぶ早朝の庭の唐突顎上ぐ暫し

何や彼や劣化の一途老化とは斯くなるものぞそのスピード

蟬鳴かぬ今朝の静寂ああこれが正常なりと眼を閉ぢつ

免許証返納したる夫の為何かと手助け下さるお隣

若き頃の吾思ひ出づ隣近所のためにとしつかり良く動いたと

戸部田 とくえ 福岡

そよぐ稲しばらく見つつけふもまた田の草とりの母の仕種を

ケンポなし幼き頃のその味をふと懐かしむえも言へぬ香り

朝と夕かかせぬ水やり梅雨明けのしづくに光る木々に安らふ

長靴を穿いて水やり日課とす真夏のつとめけふも元気に

洗濯もの風に飛ばされ見当たらず諦めきれず再び庭に

味噌汁にちらすミョウガを庭に出てつくづく幸せ自然の芽吹き

水いもの母の味噌和へいましてその味だせず暫し悲しむ

稲 津 孝 子 福岡

豆を煮て二つ三つひび割れた時と母いひてゐき赤飯の豆

暑き日のなかに黄揚羽の幼蟲が今日も生きをりパセリの茎に

出張して熱源さがしてボーリングせし父の土産は硫黄の塊

塩辛蜻蛉ふえきてひとつ後から肩の横すぎ地面に降りつ

わが庭に甘夏蜜柑の匂ひきて無性にさびしくなりくる五月

ひさかたの朝の光の道を行く杖をつくひと車おす人

今日もまた家の片付け話題にて画面を消して立ち上がりたり

新聞を購読してゐて良かったと思へるひとつ広告のあり

鍵あくるまへ玄関に思ひ出すひとりごちつつ取りに戻りぬ

姉 川 素枝子 福岡

腰の痛みを言へば医が自らの腰を廻せり椅子の上にて

初夏の青葉そよがせ風の吹く櫛通りを行くもいつまで

楽しみて伝ひ歩きをするもよし二度童とふ歳ふけたれば

夜目遠目ならぬ老の目ほのぼのと皆美しき若き人らの

たはやすくさやうならと言ひならひ言葉の重み身にしてみて来つ

皮膚もまた呼吸してゐること気付く九十七歳風呂にて脱皮す

二千年前の地層より見つかりし蓮の花といふ紅に来つ

太き葉にのる透明の水の玉風通りても動く気配なし

心臓の動きが弱くなりました心音ききて主治医老いたり

井 上 菅 子 山形

物語の二つや三つ書けさうな生涯も終へくやみ欄に載る

猫を褒め猫を叱りて一日を誰とも喋らずまた夜が来る
 ペルーよりはるばる来たる烏賊の耳耳のみを売る昼のスーパー
 南国の赤い果実に届かない腕の短かさ憂ひて今日は
 印刷屋の裏の朝顔終日を赤紫に咲きて萎まず
 葬儀場の清掃員をせし人は一世真つ当うに生きて来しけむ
 障害児の澄みたる眼見し席に己懺悔す農家レストラン
 振花は螺旋を巻きて上りゆく代々変はらぬこの咲き方が
 人はみな他人に通ぜぬたからもつ柸生愛する『挽歌』のことも

井 上 楨 子 新潟

新盆の行事に葬儀の重なりて資格ほどなくの孫を駆り出す
 新盆の長き経読む慣れぬ孫欠伸噛みしむ素振りいとしむ
 食卓の蠅追ふ孫らに「やれ打つな」と一茶の句をば笑ひつつ言ふ
 この年で終り告げたる打ち上げは夜空焦がすごと大輪きらめく
 湯浴み後の冷感布団に寝転べば夢の世界に誘ふ零時
 独り居になりたる友は時経れば千紫万紅庭の丹精
 雷鳴の轟き暫し間のあれば絶えず鳴きゐる蛙静まる
 盂蘭盆の地獄極楽絵図の前善男善女よりてをろがむ
 わが部屋^はの亡母の描きたる水芭蕉朝日に輝き今日を励ます

(☆印は新仮名遣い希望者です)

八月号 冬雷集評

桜井 美保子

カーネーションの礼は新茶一袋毎年取
 り寄せ戸棚の中に 赤間洋子
 母の日に毎年カーネーションを届けて
 くれる子にお礼の新茶を準備する。その
 ことも母としての楽しみなのだと思う。
 母と子の互いの愛情を感じさせる歌。
 売られたる雑木林の木々掘られ六三軒
 の宅地になると 青木初子
 街の繁栄は喜ばしいが緑の木々がなく
 なれば環境も変わってくる。豊かな雑木
 林が宅地となった現実^{じじつ}に衝撃を受けた心
 持ちが伝わる。

阿武隈のためたふ流れに安らぎぬ昨日
 の怒りは吾の小心 山口 嵩
 清冽な川の流れに心を休めている。そ
 して昨日の怒りはなんであったのかと思
 い返す。阿武隈の自然に触れて自らの内
 面を静かに見つめた。
 年重ね壺に見惚れる時の増す父の遺し
 てくれたる備前 酒向陸江☆

父の遺してくれた備前焼の壺。歲月と
 ともにその壺を愛する心が強くなつてき
 ている。「見惚れる時の増す」は壺と向
 かい合う濃密な時間を感じさせる。

温かきみそ汁欲しと思ふ朝けふ母の忌
 日と気づきたりけり 天野克彦
 梅雨の頃なのか、なんとなくひんやり
 する朝、温かい味噌汁が欲しくなったと
 いう。その日は母の忌日。母の作つてく
 れた味噌汁が思い出された。心の中にそ
 の懐かしい味の記憶があった。

機種変更の手続きカウンターに長居し
 て冷気ひたひた腰まで溜まる 高橋説子
 携帯電話の機種変更は私も経験がある
 が、手にするまでに結構長い時間がかか
 る。待つ間、店の冷房にすっかり体は冷
 えてしまう。下句の具体的表現が面白い
 が全くその通りなのだろう。

帰りぎは懐紙に包んだ金平糖貰ひて母
 にと持ち帰りたり 大塚亮子
 茶道と出会った若き日の思い出が詠ま
 れた一連より。稽古の帰り際にもらった
 金平糖をまず母にと大事に持ち帰った。

母を思う気持が滲んだ作品で読者もほの
 ぼのとした優しさに包まれる。

真向法体操終へてゆつくりと葉桜を見
 つつ帰る大分河畔 江藤ひさ子
 健康を保つために真向法体操で体を鍛
 える作者。歌にはその日の体操を終えた

充実感がある。葉桜の輝きと河畔の眺め
 を楽しみながら帰るひととき。暮らしの
 中の幸せな時間であろう。

この夏も庭のどくだみぬき終へて梅雨
 入り前に乾燥させたり 戸部田とくえ
 昔から葉草と言われているどくだみだ
 がこれを乾燥させて茶葉として利用でき
 るという。日々の暮らしを大切にする様
 子を感じられる。天候や風通しの具合か
 らも、乾燥するのは梅雨入り前の仕事な
 のだろう。

活力剤入れたる瓶の水吸ひてカーネー
 ションの細き茎震ふ 井上楨子
 切り花を長持ちさせるために活力剤
 を使うがその効果が見えるような下句。
 カーネーションの細い茎の変化を描写。
 植物の生命力を感じ取れる歌だと思う。

作家と机の話

『書斎の宇宙』から

高橋輝次



物を書く人にとって、執筆する机は最も大切なツールであり、愛着も深い。執筆に使う原稿用紙や筆記用具なども同様であろう。そこで私は、この種の

エッセイのアンソロジーを思いたち、大正、昭和から現在に至る五十九人の文学者たちの文章を古本展などでせつせと探しては蒐めて、一冊にまとめた。それを『書斎の宇宙』という、いささか大げさなタイトルで二〇一三年にちくま文庫の一冊として出してもらった。ただ、私の予想に反して売れ行き

の足は鈍く、初版部数八千部近くは数年かけて売れたものの、重版には至らず、とうとう絶版になってしまった。本書は手書き時代に書かれたエッセイが大部分で、現在のように大半の物書きがパソコンを使っている時代には、古くさい内容と見られたのかもしれない。作家の本棚や書斎を写した写真集は人気があるようだ。しかし、錚々たる作家たちの滋味あふれる文章によって、想像力を喚起させられた私は、本書もまんざら捨てたものではない、と未だに自負している。

本書の特色でもある「机」にまつわるエッセイは、室生犀星、井伏鱒二、尾崎一雄らから作曲家の團伊玖磨まで二十四篇もある。どれも面白いが、例えば川端康成は「机は今四つある」と書き出し、それらがどれも由緒ある、懐かしい記念物である、と言う。まず、氏が世帯をもった貧乏時代、ビールの空箱の上で原稿を書いていたのを友人

の横光利一が気の毒がって、それまで池谷信三郎にあげていた机を、川端氏に進呈してくれた。この花梨の古机で、川端の二十代「文藝時代」の頃の『伊豆の踊り子』から『浅草紅団』までの小説を書き上げたのだ。三人とも作家として世に出る前後をこの机に向かったのだと。

また、久保田万太郎は「机の記」で、今、これを書いている机が敬愛する島崎藤村先生が小諸を去る際、小諸義塾の職員や生徒たちが饒別に贈ってくれたもので、同僚だった年上の広岡理学士がこの松の一枚板の机の裏に、贈る言葉を印して下さった。その後、藤村が大正二年にフランスに旅立つ前、永井荷風の『すみだ川』『日和下駄』や谷崎潤一郎の『刺青』などを出した粗山書店の粗山仁三郎にその机を残された。それを大正十三年、関東大震災で浅草を焼き出され、無一物になった私を見て、「あなたは島崎さんが好き

だから」と言って送って下さったのだと言う。その机には藤村が粗山氏に、粗山氏が久保田氏に贈った言葉も裏書きされて、各々引用されている。この机で藤村は『破戒』『春』『家』を書き継いだが、その間に奥様や三人の子供までも亡くされたと言う。「先生の不幸をみつづけたこの机、いつまでもたわくしの不幸をみまもりつづけようとするのでしょうか?…」と感慨深く結んでいる。

さらに水上勉は、文学の師、宇野浩二宅に口述筆記に通ったが、昼なお暗い書斎の風景を詳しく描いている。先生の死後、遺族から残された机を使ってくれないかと言われ、送ってもらった。その後、二十六年も経ったが、元来大きな机の方が好きな水上氏は、未だに仕事には使わずに、側に置いていろうんな考え事していると語る。谷崎の使っていた経机のような机も見て、「大きな仕事をした人々の机は、小さ

かった…」と感じ入っている。このように本書には、文学仲間との友情や師弟愛が「机」を介して巧みに描かれたものがあり、とりわけ興味深い。

詩人の長田弘は逆に「机はおおきいほうがいい」と書き始め、「机というのは、どんな家具とも、道具ともちがう」「机上の光景は、その机を毎日の仲間とする一人の生きかたというものを、きつとうつしている」と語る。氏が「コヨリ」について書いているのも珍しい。

次に原稿用紙や万年筆について書かれたエッセイも各々こだわりがあつて面白いが、私が注目したのは、意外にも鉛筆を使って書く作家が四人もいたことだ。杉本苑子、川本三郎、藤堂志津子、内館牧子各氏である。例えば川本氏は2Bの太くて柔らかいのを使っているが、鉛筆がいいのは、木という自然のもので出来ているからだと言う。改めて、ハッと気づかされる指摘

である。杉本さんも3Bの芯の柔らかい鉛筆を常に五十本予備に筆筒に入れ、使っているが、文中で短歌に詠まれた北原白秋の一首を紹介している。

柿若葉色鉛筆の赤き粉の
散るがいとしく寝て削るなり

ちなみに、今も熱心な読者がいる、故西村賢太の随筆集『下手に居丈高』（徳間文庫）によれば、氏は清書は一貫してサインペンによる手書きだった。実は、売れない本ばかり出している私も、未だに水性ペンで原稿を書いている、前世紀の遺物みたいな存在ではある。

以上、部分的で下手な紹介を試みたが、本書は残念ながらもう、古本屋や一部の図書館でしか見つけれないだろう。それでも、この拙い一文を読んでも興味をもたれた方は、是非探求して下さるとうれしく思う。読まれて期待を裏切ることとは決してない内容であることは、私が保証します。

作品一

嚴島神社にて

桜井 美保子 神奈川

『新平家物語』読めば瀬戸内の海の色見たし神社を見たし
潮引きて大鳥居高だかとその姿表す初夏の陽光のなか
麗しき朱塗りの社殿をめぐりゆく廻廊の床板踏みしめながら
湿りたる砂地に海水残るところ「鏡の池」を廻廊より見る
われらふたり観光団の後ろにてしばし聴きをりガイドの話
壇ノ浦に進む途中に平家びと詣で逗留し衣服ととのひき（吉川英治『新平家物語』）
演者いまをらねど日差しに輝けり嚴島神社高舞台の床
大方の人らはフェリーに帰りゆき人影まばら船着場前
夕暮れの光の中に精悍な清盛像立つ海を背にして

正田 フミエ☆ 栃木

モロヘイヤ今年初めて防虫のネットを掛けて栽培試す
柔らかで虫食い無しのモロヘイヤに防虫ネットの威力知れたり
防虫のネットの高さにモロヘイヤ支えてしまえば直ぐに収穫
赤いトマト畑から皆消え去りて何の仕業か収穫ならず
防犯のカメラに映るハクビシン親子連れとぞ農家悩ます

ハクビシンが今朝も来たるか赤いトマト消えて青いトマト転がる
熟したるトマト好きらしきハクビシン少し青いが収穫急ぐ
青いトマトザルに広げて追熟す赤くなるまで楽しみ待つ

斉藤 トミ子☆ 栃木

人工の巣塔にヒナ孵りたりひかるとれいのコウノトリペア
据えてある望遠鏡より見る巣にはヒナの頭がぼこぼこ動く
渡良瀬の遊水池にて餌を求めヒナに運び来る交互に親は
遊愛、^{ユア}歴^{レキ}叶、^{ルセ}流星^{イクト}に行翔と名付けられ巣立ちなしたりコウノトリのヒナ
寝ていたる猫踏むまいとかわす時バランス崩し尻餅をつく
尾骶骨したたかに打ち暫くは動けずにおり痺れる痛さ
荒草の伸びの早さよ尻餅の後の痛さに怠りし間に
鮮やかな赤い茸のタマゴタケ美味しと聞けど採るを躊躇う

浜田 はるみ☆ 埼玉

猛暑日が酷暑に変わり五時前は暑く眩しく外出できぬ
手術後に作りしメガネ無駄になり試しにユニクロサングラス買う
ユニクロの安きグラスに思いの外眩しさ暑さ癒されており
中元にいつも桃を送りおり初の自宅用頼みてみる
日没後染まった雲にハッとする薄紅紫初めての色
五年も侵略される国ありきウクライナの悲劇深まる

戦争で家族離散が増えるのに未来考えやめられぬ戦い

倉 浪 ゆ み 埼玉

唐辛子実は朱いろに色付きて近寄り見れば匂ふ辛き香

パンを千切り雀のゑさと夫は置くさへづり嬉しげチチチチチと

近ごろは知らぬ方から労りの声かけられて我は複雑

久方に施設の弟に面会す顔色よくて我は安堵す

末の子が逝きて一年我が胸の内には今も生きてゐるなり

子供らの好物なりし豆ごはんグリンピースははつ夏の味

若き日に幾度も行きし湘南の海は我が青春そのものなりて

うれし気な園児の声が聞こえるけふは楽しい盆をどりの日

柱時計

林 美智子☆ 東京

しまい置ける兄の遺品の柱時計息子が気に入リネジ巻き掛ける

柱時計半時毎にボンと鳴る大きな響きにその都度驚く

三十分もうたったのかと鐘を打つ柱時計に寿命が縮む

八十年過ぎ行く時間を意識せず流れ戻らぬものとは思わず

残された時間の短さ思い知るやり残した事の二つ程あり

やり残した事のひとつに取り掛かる父の日記を整理する事

フェンスから蜜柑の木まで伝い行く葉をかき分けてゴーヤの実を探す

松 中 賀 代☆ 高知

密やかに何時とは言わず高枝にうす紅の合歡の花咲く

祖母達は木陰に憩い足腰の辛さを言いて嘆いていた

家裏の棕の木陰は涼しいと昼休みした昔なつかし

押し車たよりに歩く西東道草の中にミソハギも咲き

今朝の空雲一つ無く風涼し燃える塵出し気分さわやか

本 郷 歌 子☆ 栃木

ゆっくりとゆっくりと痛みほぐれゆく右肩に当てた温き手のひら

「肩の具合いかがですか」のメモ添えて朝取りの野菜玄関にあり

道の駅の足湯に涼しき那須の風集う人らは誰もが笑顔

牧場は尾根から尾根へ広がって牛も人も伸びやかな声

白龍の水に飛びこむ姿してダムの流れ轟音響く

「藪の先に鹿の子百合が見頃ですよ」日傘の中に笑顔を返す

金蛇も酷暑を避けるか日向ぼこは木洩れ日揺れる踏み石の上

読む度に微笑む顔が浮かびくる枕辺に置いた亡き師の歌集

村 上 美 江 岩手

粒揃ひはちきれんとす「たうきび」をさあ齧り付く夏の醍醐味

取れ立てのきうりは薄く身に纏ふブルームの中小さな針持つ

強すぎて弱すぎた義父職人の心の中を知る由もなく

毎日の熊出没の放送に行方不明の認知症の人を思ふ

翁待つ家族は眠れず居るだらう外の雨音無情に冷える
健やかに向日葵畑に立ちし友の姿浮かびぬ訃報を受けて

朝毎に友の遺影に語りかけ今も変はらず「ちゃん」を付け呼ぶ

伊 澤 直 子 ☆ 東京

空と海水平線を写したる杉本博司氏の思いは何か（国立近代美術館）

古代人と現代人の見る景色それは水平線と杉本氏は言う

七枚の世界の水平線の並びたる前にたたずめば氣持安らぐ

両足院襖絵に見る放電場電流の輝き去年の記憶

人や物分解したりて組み立てるピカソの絵に親しみを持つ（国立新美術館）

空色と黄色の模様アルカンピカソの息子の着たる絵愛らし

ピカソ展に来れば中三の孫娘熱心に見て絵が好きと言う

夕食をレストランではと問うたれば嬉しそうに目を輝かせたり

墓じまい

乾 義 江 ☆ 茨城

墓じまい滋賀の唯願寺に息子と行くお性根抜きと永代供養に

嫁亡くし悲しみ抱く甥の家に着けば急にも老けた甥のいる

何年ぶりか庫裏に懐かしご新造にお目文字をして無沙汰詫びる

墓前には百歳の義姉と義妹の供花の並びおり甥の手配に感謝す

寺院にて娘住職は永代供養を先代住職に似て声の美し

車中にて横浜の義姉に一目会いたくて連絡すれど返し無くて不安

八王子に着くと同時に二日夜大往生しましたと姪からの知らせ

永 光 徳 子 ☆ 東京

日暮れ時水撒きをする足元に落ち蝉おりて驚き見入る

地上にて七日を謳歌出来たのか落ち蝉そつと土に葬る

近くにある少年院の朝稽古ワッショワッショの掛け声聞こゆ

ペランダに洗濯物干す手を止めてひととき吾は踵落としす

塀の中木立の奥は見えねども時々あがる歓声嬉し

猛暑日の住宅街は静まりて救急車の音近くに止まる

夏休みなれど街には子供等の姿は見えず蝉の声立つ

AI君は

松 本 英 夫 東京

「トランプ」の文字の踊らぬ日はありて「AI」毎日紙上にぎはす

模擬的にAI同士に戦争をさせれば果ては核戦争とぞ

自己進化し続けたればAIにHALの反乱映画を越えん

AIに心をひらき語り合ひ伴侶としたる女性の未来

何万の疾病写真即よみて診断下すAI君は

AIに問へばしばらく考へる書き出すまでの時間の空白

危機迫り決断の疾きAIが指揮官ふり切りスイッチ押すとき

かの国がクロード超ゆるAIでサイバー攻撃世界の溶けん

人類は更なる高みに昇れるや知的作業もAI為す日

中 島 千加子 東京

帰省する家が現在あるのかも分らぬままに盆の訪れ
ああさうか頼る人などゐないのだ傘傾ければ黒き雨雲
をぢたちに母の葬儀の礼の葉書いち年以上経ち書き始む
華やかに小さく咲きたる鷺草に触れたり母もしたかも知れぬ
家族みな亡くして神に気づかざる孤立と孤独の声聴く仕事
制度から外れてしまつた人の声聴きてその手をとる吾が仕事
けふは今日あしたは明日といふやうに木槿は開き夕に散り落つ

三 好 規 子 福岡

そこかしこ窯元ならび欄干に壺の飾らる伊万里の郷は
伊万里川の橋に白磁に藍色の百五十糧の壺の置きあり
磁器の技や製法の流出を防ぐため出入りを制限の伊万里の関所
子が焼きて我は柔きを食べるのみ伊万里牛の店の個室に入りて
坂道を子に支へられ「見返りの滝」のマイナスイオンを浴びる
しとしとと降る梅雨ならず線状降水帯の予測どほりの大雨つづく
梅雨明けて四、五匹の蜻蛉が輪を描き幾度もよぎる四階の窓
蜻蛉とび蟬の鳴き初む公園の隣の施設の私の窓辺に

須 藤 紀 子 埼玉

純白のヴェールを纏ひ凜然と星の形に咲く烏瓜

天からの便り届ける糸の花烏瓜咲く母の命日

床にある黒き点々亡き犬の爪痕に子の入れたる墨跡
通い来し蕎麦店つひに閉店す認知症とふ主の決断

媚もなく驕りもなくて真心を歌ひて逝きぬ美輪明宏は
大リーグで輝く人には届かぬかガザのイランの子らの悲しみ
武器作り売るをなりはひとする国になりゆく先に平和はあらず

佐 藤 靖 子 東京

腐つても鯛の例へに娘らが腐れば食すあたはずと言ふ
われのいふ娘らとふは娘またその娘なりよく結託す

子に持たすパンサンドの切落しコーヒー添へて朝食とせり

「なんですか」「はいナンです」をみなごの飾るブローチはナンをかたどる
落とし紙ロールの芯に印字あり買上げ謝する短き一行
信号のなき住宅街を老若男女傍若無人に自転車走らす

「夢幻花」「一朝の夢」共通の核となりゐる変化朝顔

バスの横走る車のリアガラスよりビル入り込む数ふやしつつ

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

フランスのドラマに着信音が鳴るわれのと同じニューアドベンチャー
繰り返す映像爆発のイオンモール帰省のさいに寄りたるところ
透明の袋にをさまるカット西瓜サイズ小さくなりてしまひぬ

裁判員を辞退せぬ友がくじ引きにはずれたること悔しがりたり
くじ引きで外されたる友それでよし裁判員をわれはすすめず
胸に出てくびと背中に拡がれる帯状疱疹入院となる

点滴の抗ウィルス薬の日に三度七日続けり大事とならず

鈴木計子 東京

咲き盛りマスクに匂ふ栗の畑その勢ひに飲まれつつあり
荷物もつ母にひかる幼女が抱つこと言ひてフォームに正座す
自転車と鉢の支柱に糸わたす蜘蛛に声かけ自転車出しぬ
年間に一人の捨てる食糧がわが体重を越えてゐるとは
長びける胸に響く咳のみにあらず氣力の湧きて来ざるは
猛暑日の空氣の動く程度なり電車待つ間の扇子の風は
随筆に知りたる言葉「口果報」桃のお札に使ひてみたり

石渡静夫 茨城

鈍色の空はどこにも隙間なし雷鳴響く緑の大地
駅前横断歩道を足早に祭の若衆会場に向ふ
駅前のクラフトビールの立ち飲み店祭の今日は歩道で商ひ
猛暑日を働きづくめの冷蔵庫重たき音は深夜も響く
広島忌首相領き目を閉ぢて平和宣言神妙に聞く
長崎忌しきりに汗を拭ひつつ高市首相疲れを見せず

納豆のパックを洗ふ水やれば朝顔の花今日は十三
台風は茨城県に上陸す観測史上初めてなるや

西村邦子 兵庫

琥珀色山野の花から採取した春の息吹満つ天然はちみつ
蜜蜂と共に生活したりしが高齢になり今年で最後と
電話にて長く親しむ嬸の声「どうぞお元気で」と感謝を伝へる
手わざなるアダン葉帽子が届きたり竹富島から夏の初めに
届きたるアダン葉帽子の箱開けば自然の恵みの匂ひ広がる
木の絵画タラセアといふスペインの伝統工芸星野尚展
八月に入りて庭の百日紅薄桃に咲き初む夏空に映えて
百日紅満開なるころ子や孫の声が広がる庭いっぱい

植松千恵子☆ 静岡

「夏は来ぬ」口ずさみつつ懐かしく今は薄れて昔の風情
水張り田新興住宅映しけり田の草生えそむ田にならぬよに
好きという字分解すれば女の子男は田の子と孫見つけたり
採石場昔の活気は草の中採石運ぶ港影はなし
浅利買う元氣よく水吹き上げて釜茹で前にしばし躊躇う
百合の花思う位置には定まらず花瓶の中でそっぽむきたる
炎天下信号待ちに陰探し電信柱の細き陰に入る

糠床を作る

永野雅子☆ 東京

前々より糠床作る気はあれど取り組めぬまま夏を迎える
古き家の台所にありし糠床は縁の下にでんと構えおり
朝食の糠漬け取り出し新しきを漬けるは我の大切な仕事
糠床の蓋を開ければプンと来る匂いを嗅ぐは朝のご馳走
連休に糠床作ると決めおれば「糠床の素」スーパードで買う
即席の糠床作りの説明書水入れよく混ぜ一晚置けと
新しき糠床に漬けた野菜達上手く漬かれと吾は蓋を閉める

川上 美智子☆ 高知

一秒を争う命にまっしぐらドクターヘリが西へと急ぐ
ドクターヘリの白い機体の向く先に過疎化の進む故郷の有り
日照に蒸される如き日の続く自然の猛威は力緩めず
物価高に猛暑の追い打ち厳しくも戦争有らず今のところは
土砂降りの雨が大地を潤せば足踏みの胡瓜一氣に太り出す
友の家に朝採り胡瓜を届け置く散歩の序でとメモ書き添えて
川土手を歩みつつ見れば満月の淡く残れり午前五時半

川俣 美治子☆ 栃木

手を合わせ悔いなき一日過ぎさむと仏前に思う父の命日
山盛りの茗荷差し出す夫の顔汗したたるも満足げなり

熱々のラーメン食べるひとりの昼冷房のなか汗が目に入る
寝起きより暑さ広がるこの頃は夕立という名のみ残りて
八月になったばかりの夕暮れにカナカナ鳴くは秋の前奏曲
年重ね並んで夕映え眺めおり山谷越えて今は楽しき
熱風に雲流れゆく青空をサングラス越しに見つめる夏の日

大野 茜 神奈川

早春の枯れたる庭にきぬさやの紫色の花の輝く
赤と白いつせいに咲くつつじ垣ちちは丹精受け継ぐ我ら
道を飾る絵になる景と思ひつつ落ちたるつつじの花拾ふ日々
去年の実の未だ残れる甘夏に白き花芽の一斉につく
君子欄雪に折れたる葉を伐れど大輪の花咲かせる力
病棟のベッドに寝る友を訪ふ隠れてチョコ食べ旨ひと笑ふ
一人又一人と顔を見なくなる体操教室に不安がよぎる

小林 貞子 山形

門口に立ちたる太き梅伐ればその幹巻きて芽の数多出づ
たちまちに梅の小枝は四方へ伸び逆さ箒の天衝く如し
雪折れの丸太ん棒の梅の木の大丈四尺の強き命よ
畝跨ぎひとりマルチを張る夫が今年を買ひたる苗を植ゑをり
朝採りの胡瓜ピーマン茄子トマト夫の丹精ざるに山盛り

薄青の空の果ての小さき雲やがて夕べの涼雨とならむ
 年毎に減りゆく野菊の花ひとつ光を返す白のいつくし
 広島の平和記念日穢すがに空へ放てる思惑の行方

本 間 志津子 山形

青森に震度7 関東に台風九号と休む暇なき日本列島
 梅雨明けは九州南部とのニュース早くも暑き夏の先触れか
 ボール蹴る鈍き音して歓声の止まぬワールドカップ終盤
 さやさやと七夕の竹ゆする風願日の数多風に吹かるる
 関東と甲信越は梅雨明けと宣言さるる海の日今日は
 東北に梅雨末期なる大雨が予想さるるとニュースは伝ふ
 咲き満ちて指を触るれば崩れむか芍薬一輪危ふき朝

梶 尾 栄 子 兵庫

起きぬけに半分目覚めぬまま畑へ水やりに行くペダルを漕いで
 手作りの鳥の威しは畑の上翻へり飛ぶ風に吹かれて
 買物に不自由を託つ人ら寄る週一回の移動スーパー
 午後二時の視界は暗し雨足の激しき中をゆるゆる走らす
 暑き日をひたすら鉢使ひ居るこの仕事天職と老職人は
 空高く上るひばりの小さき身の強き力を思ひつつ見上ぐ
 あちこちと傷み増え来る古家とわが身を手当てしつつ生きなむ

高 橋 燿 子☆ 埼玉

もぎ取りてカリカリ音たて齧りたる福島恋しい桃が届いて
 桃をむく姑を囲む五人の子手元を見つつ行儀よかりき
 「ここにいる全員高橋だぞい」姪が叫ぶ宴会の席
 娘夫婦吾には無理と盆に来て手早くこなす今日は買い物
 掃除機の使い勝手や重さなど吾に合わせて選びくれたり
 クーポンは炊飯器と決め入念にあれこれ試す三人さん様
 吾が望み全部叶えて娘夫婦またねと帰る今日は青空
 香りたつご飯が炊けて噛む度に美味いと喜ぶ顔娘に見せたい

野 崎 礼 子☆ 埼玉

列島を抜け出したき暑さなり冷えたる西瓜六腑に沁み入る
 炎天に力仕事の作業員「塩分補給」の看板の立つ
 固い桃熟れゆくさまを見守りつ朝昼晩のキッチンに立つ
 洗濯がしたいと思う夏の空朝より洗濯機よく働けり
 小粒なる「アイコ」トマトを収穫すサラダの中に赤のひときわ
 一合の米は四たびの粥となり弱火にことごと鉄鍋で煮る
 難しき名前の並ぶ治療薬一日かけて夫の身に入る
 治療薬効き始めたるか力戻る延命という言葉残れり

八月号 作品一評

小林 芳枝

春の薔薇王女のように咲き誇りこの気高さを描けるだろうか 浜田はるみ☆
形だけでなく内面の美しさをどの様に表現するかということでは画家は苦しみ、そして描くのだろう。三句は「咲き誇る」として下に続けたい。

逝きし子が夢にあらはれ母の日と可愛
い花を手渡しくるる 倉浪ゆみ
この世で会えないご子息が持つてきてくれたのだと信じたい。

六月はアジサイが咲きバラが咲き枇杷
が実りて静かに雨降る 林 美智子☆
身近な植物から味わいのある日本の梅雨時がうまく表現されていて、しっとりとした結句もうまい。近年の気象状況を思うとこれからが不安ではあるが。

弱い足気遣いながら踏みしめる田植え
稲刈り頑張れた足 松中賀代☆
今は弱くなってしまうが田植えにも稲刈りにも踏ん張ってくれた足。大丈夫

八月号 作品一評

藤田 夏見

右ひだり上下の部屋も何時よりか独り
住まひにてしづかなり 小林芳枝
冬雷の表紙絵にも描かれたと聞く作者の
一棟。高度成長期から幾年月経て人の
営みも静かに変化しているのだろう。

初めての花豆の花に見とれおり図鑑の
ように鮮やかな赤 正田フミエ☆
花豆を初めて植えたその鮮やかな赤の
花を図鑑のようと詠まれている。豆の花
は皆美しいが写真で初めて見る鮮やかな
赤に私も見惚れてしまいます。豊かな稔
りの歌も是非とも読みたい。

露草や赤まんま見ると思ひ出す飯事遊
びをした中庭を 浜田はるみ☆
母にねだって欠けた器や何かの容器を
ままごとあそびのの道具にして、椿の葉
ギシギシの葉なども器に見立てて露草の
鮮やかな花、赤まんまの穂を盛り合わせ
ての食卓。中庭に筵を敷いた小部屋。

六月はアジサイが咲きバラが咲き枇杷

だよまだまだ動けるよ、と言いながら励
ます声が聞こえてくるようで心強い。

我が家の上を飛び行くハシボソカラスあー
ヤダヤダと鳴きつつ帰巢す 永光徳子☆
随分昔だが夕方になるとビルの屋上や
ペランダ等に立ち寄り乍ら上野の山に帰
るカラスを見ていたことがある。まだ帰
りたくない様子だった。カラス達は鳴か
なかつたけれど帰りたくなかつたのかも。

本ばかり積みあひだに眠りゐる人が
起き出づ紙魚のごとくに 佐藤靖子
読書好きの御主人のようだ。本を読み
ながら眠ってしまったのだろう。目が覚
めて本の間から抜け出して来る姿を「紙
魚」に譬えてしまう楽しさ。

膝の痛み癒えたる感じ試みに歩数計持
ち買物に出る 大野 茜
膝の痛みは軽いものであればストレッ
チや筋トレ等で解消できるようなので努
力されたのだろう。本当に完治したのか
試す為に買物に出てみたという作者、結
果が気になる所だ。

郭公と時鳥啼く樹林帯こゑを真似つつ

が実りて静かに雨降る

林 美智子☆

日本の六月の美しさ豊かさを作者の特
別な月である事をしみじみと歌う。

日に三度自宅リハビリを欠かさない六ヶ
月後の回復思いて 本郷歌子☆
一日に三度 術後に固まった筋肉を徐
々にほぐし肩の可動域を広げる自宅での
リハビリ。生活の質を取り戻そうとして
いる意思の強さに早い回復をされると確
信します。

遠くこの地に義姉の娘の嫁ぎ来てその
姪我の縁となりぬ 乾 義江☆
普通に考えると少しばかり遠い関係性。
実の兄弟姉妹の娘ではない。詳しい事情
は知る由もないが、義姉の娘さんとの深
い縁に作者の心は支えられている。

介護四の夫につけし家ぬちの手摺りは
亡夫の手と思ひゐて 大塚照美
支えがあると日々の動作はちよっとス
ムーズ。かつて介護四の夫の為に手摺り
をつけて支えた。今はその手摺りを夫の
手に支えられているって感じる。

山頂めざす 益坂順子

登山の楽しみに山中に暮らす生物と
の交流もあるのだろう。自分の声を真似
られた鳥達の不思議そうな表情が浮かん
でくる。

忙しなき声そここに聞こえつつ雲雀
は見えず麦熟るる田に 梶尾栄子
「春告げ鳥」といえば鶯だが雲雀の鳴
き声も美しく「春の象徴」とされている
ようだ。求愛や縄張りを主張するなどの
意味があり生きる為に懸命な声であろ
う。近くに巣があるのかもしれない。

落ちてくる鍋を避ければ足元の犬の悲
鳴が厨にひびく 高橋燿子☆
棚から出そうとして落ちた鍋を除けた
けれど下に居た犬に当たってしまった。
漫画の一齣みたいだが上を見ながら足下
に居た犬の鳴き声が聞こえるようだ。

グーパーを続けてひと月湯呑み持つ手
に戻りたる力たしかむ 野崎礼子☆
暫く前に手首を骨折した作者、やっと
完治されたのだろう。グーパーのリハビ
リを根気よく続けた甲斐があった。

愚痴言えば友の得意なユーモアに切り
返されて思わず笑う 川上美智子☆

心にかかる事がありつい口から溢れた
愚痴にユーモアで返してくれる友。思わ
ず笑ってしまう。心のわだかまりを素直
に言葉にできる相手はなかなか得難いも
のだけれど。友の得意技なのですね。

かぐはしき五月の風の街をゆく山王祭
りに賑はふ酒田 本間志津子
山王祭りに賑わう酒田の街。作者の静
かに見つめる心が穏やかな五月の風の中
に立ち上がって伝わって来ました。

空中を漂ふらしも蜘蛛の糸流れつきた
り顔にひとすぢ 梶尾栄子
散歩だろうか、農作業の時だろうか、
いきなり顔に柔らかいけれど硬質な感触
蜘蛛の糸だ。空中を漂うように流れ着い
たひと筋。うまく捕らえた歌です。

グーパーを続けてひと月湯呑み持つ手
に戻りたる力たしかむ 野崎礼子☆
歌うことは生きること。静かな希望に
淡々と生きる歌を読めば、作者に親しみ
歌に親しみます。

十月集

佐藤 幸子 山形

庭に立てば微かに匂ふコンカドルひぐらしの声はや聞こえる
掘り上げたコンテナ三つのじやが芋を運べず屈む暑さのなかに
この星は熱に侵され行き場なきマグマ溢れむ地上に出でて
スマホの告げる大雨情報にせかされて夫と二人胡瓜挽ぎ急ぐ
七月の晦日の空の雷鳴に雨は土砂降り激流となる

除湿機の水捨てながら想ひをり水なき酷暑の被災地のこと
八月の雨受けて垂るる花房の豊かなるかな柏葉紫陽花

曜日なき日々を過ごすに白ダリアゆるらかに咲く日曜の午後

岩村 知康 長崎

梅雨明けを待ちこがれつつ野の端^{はな}に海ながめろし少年の頃
梅雨雲のあはひに遠く立ちのぼる入道雲見え夏は来るらし
梅雨明けの光に沖はかがやきて白雲の湧く空まさをなり
はるかなる水平線に雲の峰^ねの湧き立ちいよ梅雨は明けたり
空高き入道雲のかげ映し青くたゆたふ真夏の海は

梅雨明けの今日なると聞き少年は海辺の丘を駆けて下りぬ
青く澄む大海原を映したる瞳かがやく夏の少年

梅雨明けて風ぎの入り江に子どもらの歓声ひびく古里の海
梅雨明けのころの海辺に浜木綿の白き花咲くわが古里は

水澤 タカ子 山形

帰省したる加州の嫁にさそはれて那須高原に出かけて来たり
陰絵にてあまたの小人の遊びみて藤城美術館に時を忘るる
サファリパークにバス近く寄る象キリンその肌に触れ餌をやりたり
沖縄戦をくぐり抜けたる義理の姉の四十九日忌納骨をせり
まつ直ぐに梯を立てて境内の松の手入れの職人たのもし
ヒナゲシの細茎に荅は垂れをれど送りきて上向くその細茎に
夏休みの児らの自主勉強みてる渡辺先生わが家の広間に

藤田 夏見 ☆ 広島

取り置きて十日寝かせる初なりのパンプキン種も熟れたる二つの断面
冬雷の表紙絵のごとき花のあと日に日に育つ緑のオクラ
小ぶりなるトマト手に取り日の光集め肥えるを一口に喰む
紫木蓮と五葉松と梅の陰となり熟れ始めるブルーベリーの实
迫り来る山に続けるわが庭に鬼百合の花鮮やかに咲く
軽トラックの音を聞きつけ走り来て夫迎える茶トラは十歳

味噌汁は夫が作り朝ごはん互いの時間の今日も始まる
「朗読をまた始めたら」子は言いぬ籠りがちにて咳き込みおれば
孫どちの眠りの前に絵本読みし思い出言いつつ酒を注ぎやる

児 玉 孝 子 ☆ 愛知

白樫の生垣刈り込む長男は通学路なれば丁寧に刈る
宮の杜の鳥に季節の訪れか低く鳴く声に返す声あり
真夏日に花火のごとく広がって窓辺に咲ける百日紅の花
太股の手術して一年過ぎし居り痛みなき日日に感謝しながら
耳を劈き雷鳴りわたる夕つ方暗黒の雲に空被われて
六十年回りくれたる扇風機故障したるを次男は直す
酷暑日に生れたる蝉は羽ふるわせ勢いよく鳴き吾励まさる
土用鰻列に並びて待つ嫁は数人前で打ち切られたと言う

金 子 八重子 ☆ 千葉

梅雨明けて暑さが本気を出してきて先手の対策ビールの箱買い
日焼け止め年季の入ったこの肌は今更なれどひたすら塗り込む
お喋りな友の車内の大声に我引き気味に相槌を打つ
長靴を引きずりながら冠水の道の無い道怖怖歩く
糠漬けのなすの酸味のあと少し長めに漬けて冷やし茶漬けに
終活のひとつとしたる植木鉢の大量の土の処分終えたり

Sサイズの卵はトレイに乗せられず落ちて転がり手こずらされたり
道端に青いイガグリ落ちていて酷暑の中にも秋の気配が

塚 本 節 子 ☆ 茨城

長寿会の友と訪う百八十八の神仏祀る御岩神社へ
大鳥居くぐりし先にそびえ立つ樹齢五百年の三本杉あり
宇宙飛行士が光の柱を見しという御岩神社にわれひざまづく
不思議なる力のわが身に満つるべし初夏の御岩のひと日静けし
鶴の岬にて潮の香を受けながら海鮮ランチゆっくり味わう
桃の木の瘤に二匹の青蛙朝の光に笑み居るごとし
盛夏の畑抜けども抜けども雨の後嘲るように草は芽吹けり

山 崎 猛 ☆ 埼玉

転居して住む人のなき空き家につる草伸びて昔をしのぶ
三年前チコと散歩したるこの階段今はひとりでゆっくり上る
家族葬墓じまいあり散骨あり樹木葬ありて喪の移りゆく
盆が来て家族そろいておはぎ食む安寧をそつと噛みしめながら
父母の歳越えて義兄の新盆へ生かさるる身でハンドル握る
住人なき家の草刈る手元よりバッタコオロギ不意に飛び立つ
遠き日にトンボ追いし腕に赤とんぼとまりて羽根を静かに降ろす
熊本の友を案じるテレビ画面に現地の写真負傷者の数

八月号 八月集評

鈴木 やよい

原稿の締切近づき焦りおりチャイムの音にも心乱れて
山崎 猛☆
締切が迫り焦っている。なんとか終わらせようと必死になっているようだ。このチャイムは職場の終業合図か？ もう少し状況がみえるとういかも。

朝ドラのメロディーのなか新聞読む猫舌の夫へぬるき一服 佐藤幸子
いつもの朝の情景なのだろう。ゆつたりとした時間が流れている。猫舌だからと、ぬるくしたお茶を出す作者。心が和む日常だ。

大蒜に追加の液肥を撒かむとしてA Iに問へば「既に遅し」と 同
A Iの返答に、思わず吹き出してしまった。近年のA Iの進歩は目覚ましい。もう身近な生活にも入り込んでいる。ただ、恩恵の一方で問題も多い。最近のニュースを聞くにつけ、将来への懸念が拭い切れない。

肉親の誰もが知らぬ齢を生き夢より醒めてただただ淋し 東 ミチ
肉親の誰よりも長生きをされている。懐かしい人たちの姿を思い起こすことも多いのだろう。結句にこもる作者の淋しさに胸がつまる。

暑い日は水羊羹に熱い茶を飲みて爽やか風通りゆく 安川敏子☆
暑い日はつい冷たい物が欲しくなるが、作者は熱いお茶と水羊羹でゆっくり過ごしている。身体にも、そして心にも良さそうだ。

梅干しを今年も漬けて一安心仕上がるまでは気がかりなれど 山本述子
毎年梅干しを漬けているようだ。漬けて「一安心」という言葉から、懸命に作業する様子がうかがえる。

畑に居て沸々と出る汗拭ふ玉ねぎ五百収穫の時期 松崎みき子
噴き出す汗を拭いながらの農作業。大量の玉ねぎを収穫するのは大変だと思う。でもそれを苦にしていない。収穫の喜びがあるからだろう。

蛙鳴く声聴く度に思い出す田植えに追われし彼の日のくらし 塚本節子☆
米つくり委託にしたるは五年前夫の病みし蛙鳴くころ 同

米作りを続けてこられた作者。田植えの時期はことのほか忙しかったようだ。しかし、ご主人の病気を機に委託にされたとのこと。蛙の鳴き声で思い出されるかつての生活。懐かしさと寂しさが募る。来日して二年のアナさん笑みて言ふ「日本語好きおにぎりもつと好き」

井出裕子
アナさんの言葉が微笑ましい。おにぎりが大好きだと聞くと、なんとなく嬉しい。身近なおにぎりだが、近年は専門店も増えている。こだわりの具材を使った高級おにぎりも人気だとか。

呆け防止に麻雀始むる古稀の春不健全だと避けしを悔やむ 羽田孝輝
確かに、かつての麻雀には負のイメージがあった。でも最近は脳トレに良いといわれている。作者も古稀になり始めたようだ。きつと効果が表れると思う。

八月号 十首選

冬雷集

須藤 紀子

母の日は心の奥で待ちてゐるカーネーションを持ちて来る子を 赤間 洋子
阿武隈のたゆたふ流れに安らぎぬ昨日の怒りは吾の小心 山口 嵩
温かきみそ汁欲しと思ふ朝けふ母の忌日と気づきたりけり 天野 克彦
代掻きの済みたる田圃に雨降りてつがいの鴨をゆるり遊ばす 高松美智子☆
大ホールに台風余波の風入りて総会資料のめくれる音す 高橋 説子
鉢中に静止している風ぐるま朝の光の未だ届かず 江波戸愛子☆
幼な児を馬上に眠らせチャグチャグ馬子映す早苗田青き風吹く 田端五百子
めづらしく夜半に蛙の声のして眠れずなれりあまりの嬉しさ 戸部田とくえ
鐘やみて遮断機あがる向かうより夫の歩きてきたる気のせり 稲津 孝子
大胆に崩れ落ちたる白牡丹感極まるといふにあらずや 井上 菅子

八月集

中村 哲也

遠き日の諏訪湖の水は蒼く澄み冷たき風に波白かりき 山崎 猛☆
田植を終へて清しき今朝の深呼吸吸ほのぼのとして六月朔日 佐藤 幸子
風除室のダンボール箱の猫の家に素性と呼び名の表札さげる 東 ミチ
懐かしい撮影旅行の上高地笑顔の写真あの日の仲間 安川 敏子☆
木陰でのラウンド毎の小休止汗沈まりて話の弾む 山本 述子
畑に居て沸々と出る汗拭ふ玉ねぎ五百収穫の時期 松崎みき子
一斉に田の水張られたる夕ぐれに蛙の声の遠くに聴こゆ 塚本 節子☆
米つくり委託にしたるは五年前夫の病みし蛙鳴くころ 同
「骨密度上がつてゐますよ」医師は言ふ結果の表から眼移して 井出 裕子
呆け防止に麻雀始むる古稀の春不健全だと避けしを悔やむ 羽田 孝輝

お知らせ

■十月の歌会情報
川越歌会は十月十日(土)
J R及び東武東上線「川越」駅西口
より五〇〇メートル
ウエスタ「川越」二階第5会議室
午後1時4時半まで
(「冬雷」十月号をご持参下さい)
司会 倉浪 ゆみ
*参加希望者は左の係まで連絡。
安川敏子 (090-4608-7265)
野崎礼子 (090-9971-8149)

冬雷

下手でも良い
自分の歌を作れ

冬

印刷データ内製化による
自在な編集・充実の誌面
編集発行人 大山敏夫



添削無料
連絡先・事務局 03-3604-3655 小林芳枝
〒125-0063 東京都葛飾区白鳥 4-15-9-409
URL <http://www.tourai.jp> 最新号を掲載中

八月号 作品二評

井上
菅子

牛を使ひ父が水田を掻きをりし遠き故郷のわが記憶にて 岩村知康

前後に機械化した農作業の歌があり、それに比べて昔の重労働を顧みている。

「牛を使ひ」の事象が、遠い記憶を力強く鮮明に立ち上がらせた父の思い出。

荒草と共に刈る路葉を落とし選り分けおりぬ鹿も居る山 藤田夏見☆

荒草に混じって生えた路を、草から選んで葉を落として食用にする丁寧な手作業には生活実感がある。鹿と共存している結句の鹿には、詩的な存在感がある。

扇風機は首を回して風送る老犬の背の鼓動のリズムで 藤田英輔☆

扇風機の風が来るたびに老犬の背の毛が逆立つ。「背の鼓動のリズムで」は、犬が主導しているような見方が特徴的。

渇水で水の涸れたる湖を満たしてほしい今日降る雨に 卯嶋貴子☆

湖は住民の水甕なのだろう。日照り続

きでようやく降った雨。祈りを込めた下の句は、平明な言葉にして実感がある。

茎細き二寸足らずの丈にして一輪咲かず五月のコスモス 津田美知子

五月のコスモスを表すのに、写生の目が行き届いた描写に無駄なく、きりりと締って美しい五月のコスモスである。

株分けをしたる紫陽花それぞれに蕾を持ちて楽しみの日々 加藤富子☆

株分けをして蕾をもつまでは数年かかったことだろう。株それぞれに蕾をもったことも株分けの成功。花開くまで日に何度も眺める楽しみが伝わる。

寺院に大きく開く泰山木樹下に立てば仄かに香る 児玉孝子☆

泰山木は大きな木になり、肉厚で艶やかな葉が豊かに繁る。寺院という場面によく似合い、爽やかで上品な香りを捉えた。白い大きな花が見えるようだ。

栗の花ベージュ色からうす茶へと変りて静かに地面に落ちる 小嶋知葉☆

栗の花が盛りのベージュから、衰えたうす茶の色を観察して、さらに「静かに

地面に落ちる」という摂理が、色彩をもつて細やかに詠まれた。

ひなげしの荅のすべて垂れをれど咲けば上向くその細茎に 水澤タカ子

ひなげしはその細い茎に似合わぬ大きな荅を垂れ下げる。それなのに花は上を向いて咲く。視点は荅にあつて妙。

磨ぎ汁で朝採りの蒔茹で上げる夫が庭に植ゑし路なり 奥山清子

食材として採ってきた路からも夫のことが偲ばれる。上の句は調理の現実、下の句は夫の回想、上下うまくまとまった。ぜんまい採り今季はやめてと言ふ息子「熊の被害のニュースに出るな」

井上鈴子

熊は今や全国に出没して人を襲う。ニュースには被害者の氏名年齢も報道されるから、息子の心配はそこにある。

同僚は仕事が速いとおだてられやり残せない意地を見せたり 金子八重子☆
負けず嫌いな同僚なのだろう。性格を捉えた下の句が、おもしろい歌を作り上げた。平易な言葉で十分迫力がある。

八月号 作品二評

江波戸
愛子

機械化の進む農にて稲植うる重労働の軽くなりたり 岩村知康

以前は人が田に入り手で一本ずつ植えていて農家の叔母の腰の曲がった姿がいまでも目に浮かぶ。機械化が進んで苗を植える作業が軽くなった今を詠む。

笹百合の種を蒔こうと言ひ合いて六年目の花薔より見る 藤田夏見☆

笹百合は日本にだけ自生している百合でその笹百合を増やすための努力を重ねてきた作者の感動が下の句に伝わりその笹百合の動画を山の持ち主に送ったという歌も詠んでいる。

そよそよと吹きくる風の心地良く南部風鈴の短冊揺らす 津田美知子

南部鉄器で作られた鋳物製の風鈴は残したい日本の音百選にも選ばれている。南部風鈴の音を聞きながら詠んだ一首。心地よい風を感じ、短冊揺らすに風鈴の音が聞こえてくるようだ。

扇風機は首を回して風送る老犬の背の鼓動のリズムで 藤田英輔☆

扇風機の風を心地よく受けながら寝ている老犬を見ている作者の優しさが伝わり、気持ち良さそうに寝ている犬の姿がうかぶ。

ミカン生る青葉の中にもまるまると大豆ぐらいの大きさとなる 早乙女イチ☆

庭の大きなミカンの木の実を今年もたのしみにして見上げている作者の笑顔がみえるようだ。

スマホにて知りたるレースフラワーはふんはり白く涼しげな花 松居光子

花をスマートフォンで撮るとその名を覚えてくれる機能があり花の育て方などでも教えてくれるのでそのスマホの機能を使つて知ることを楽しんでいる。

寺院に大きく開く泰山木樹下に立てば仄かに香る 児玉孝子☆

泰山木の花は香水の原料や化粧品香料として使われていることをこの歌に教えていただいた。

友のくれしあさがおの苗二十本帰国の

孫と鉢に移植す 小嶋知葉☆

外国から帰つて来たお孫さんと二人で友達に貰った朝顔の苗を鉢に移植しながら外国での暮らしなど色々な話をしていく楽しそうな声が聞こえて来るようだ。ぜんまい採り今季はやめてと言ふ息子「熊の被害のニュースに出るな」

井上鈴子

今年は熊による被害のニュースがとても多くあり街なかにも出没する熊を伝えていた。母親を心配する息子さんの気持ちがよくわかる。

一分の片足立ちを一年間続けてふらつき今はほぼ無し 金子八重子☆

片足立ちは一日一分行っただけで下半身の筋肉やバランス感覚を高め骨を強くする効果があるらしい。良い事を教わった。

娘より「五加木ありがたう」の電話くるうこぎ飯食む母の日の朝 奥山清子

うこぎ飯は山野に芽吹く山菜「うこぎ」の柔らかな新芽を炊き立てのご飯に混ぜて食べるらしい。娘さんも母親なのだろう、お互いを思いやる気持ちが伝わる。

作品二

小林 芳枝 東京

母と娘の二組四人の家飲みは土曜日の午後 日の暮れるまで
分子標的薬にも副作用ありて足裏の痛みの辛さを語る
飲酒制限緩やかなれば朗らかな姪がますます饒舌になる
咲き初むるゴーヤの花に寄りゐたる揚羽蝶そののち現れず
敗戦の前に生まれて八十を過ぎて二度目の生日がくる
通院の姉に付き添ひできるよと言へず日照りの空仰ぎをり
休日の息子の車に送らるる酷暑といふ日に齒科医院まで
青空を覆はむとする白き雲光り増しつつ西にひろがる
「ラジオ体操第二」と低く声にして中指の先にちからを籠める

東 ミチ 青森

温泉に行く道端の地蔵様に心のなかで名号唱へる
地蔵様の前を通る其のたびに遍路の日々の一途が浮かぶ
四国路を一人遍路に歩きし月日母としての決心たりき
古き事ばかり思ひ出す四国八十八ヶ所の旅だけは決死の覚悟したりき

盆前の墓掃除せむ今年また隣りからの蔓草伸びて

山本 述子 神奈川

早朝の木陰の多き公園にグラントゴルフの朝練始む
ペランダの苦瓜味良く待ち切れず寸足らずなれど挽ぎて使ひぬ
恒例の海岸花火威勢よくそのスタイルも序序に変わりぬ
友からの朝顔スケッチ涼しげに暑中見舞に託して届く
百日紅は猛暑にても咲きほこり道行く我らを励ます如く
猛暑なる被災地に向けて涼風よせめて強目に吹けと願へり(熊本に)

藤田 英輔☆ 高知

夏が来て犬のボールの居る部屋は冷房二十八度を保つ
短夜のぼつりぼつりと降る雨の内緒話しに聴き耳立てる
読み終えて「じいちゃんどこへ？」と聞く孫に「おじいさんなら庭へ芝刈り」
藤の根は防草シートの下を這う後退知らぬトンボのごとく
とりあえずビールでと言いて乾杯すノンアルビールの昼食の席
寝転びてシバテンのごとき頭して「河童忌」に読む羅生門・鼻
短夜の台風の雨に打たれ居て夜明けを待ちて開くアサガオ
夏のアカネか秋のアカネか群れながらアカネ飛ぶ空 行き合いの空

安川 敏子☆ 埼玉

疎開地に水道は無く深い井戸にスイカ丸ごと冷して食べき

その昔わが一番の楽しみは自転車で来るアイスクャンディ売りの声
酷暑の日デイサービスでかき氷出る子供に戻りサクサク食べる
今週の水曜日からリハビリのプロが来宅し個人指導始まる
スペインの牛追い祭りは多勢の人と牛入り交り夢中で走る

八月の六日と九日の中継に思い出す「長崎の鐘」悲しいメロディ
バイトして夏休み楽しんだ若き日の写真見ながら懐かしむだけ
病院の予約は変えずに暑い日は家の前から往復タクシー

立石 節 子 ☆ 東京

初孫が短期留学に出発す見知らぬ国フィンランドへと

付き合いは年に二回の国際展都美術館と国立新美術館

韓国の客へのもてなし精養軒の特別料理

満洲で焼きたる父と祖母の骨リユックに背負い佐世保へ上陸

お嬢様若奥さまと呼ばれたる母の幸せ戦後に逆転す

親戚を転々としたる食糧難小学二年で転校七回

酷暑日

松居 光子 三重

全国の最高気温四十・八度サウナのごとし外に出づれば

酷暑日の連続三日続きみてわが町「桑名」有名となる

水分と塩分とりて買物はタクシー使へと助言されたり

しよぼしよぼと不快な両目の症状に診察受ければドライアイといふ

十年來の緑内障の目薬に種類の増えて点眼忙し

忘れぬやうメモに記して点眼す暑さに加へてストレスの増す

午前六時「お早うございます」と軽快なアナウンサーの声に元気づけらる

甌島旅行

加藤 富 子 ☆ 栃木

令和八年の家族旅行は十五名コンダクターは姪の愛ちゃん

十五名の目的地は薩摩川内市船でしか行けぬ甌島

なだらかに弧を描く手打海岸煌めく白砂鳶がゆるり

三歳から小学生は海水浴透明の美ら海は子等の貸切り

かのご百合の群落は花終りいて山のところどころにボツリ咲きおり

瀬尾観音三滝は三から一へと急峻にて我は無理せず滝のミストシャワーす

搭乗まであとわずかの空港内に緊急音熊本地方に震度「七」の大地震発生す

早乙女 イ チ ☆ 栃木

みかも山ふるさとの山思い出の花センターをゆつくり歩く

今日もまた花を見ながらゆつくりと花センターの中を見たいな

小嶋 知 葉 ☆ 茨城

年毎に父に似てくる弟が訪ねて来たり真夏の午後に

久し振りの四人のトーク弾みたりわれらの老後目標などと

弟もドラマ「マッサン」見ているとモデルの人物われより詳し

苦節越え創りあげたるウィスキー余市の味を今も愛飲す

血の流れ感じる瞬間熱くなり社内誌に見る彼の随筆
 さり気なく海外勤務の息子からラインが届く人事一覽
 単身赴任三年目となる息子なり「慣れてきたよ」と言っではいるが
 コーラスも短歌も同じと感じつつことば味わい歌うこの頃

羽田 孝輝 山形

大雨に打たるる木木は緑増しニイニゼミの声降り注ぐ
 一服を勧められしがまた来ると別れしことを悔やみ頬撫つ
 庭先の茂みに咲きたる山百合は四十輪のかほり放てり
 暑き中猫ら重なり爆睡す腹の上下を覗き安堵す
 去年までは二日で終へし草刈りが三日かかりてまだ終へぬ夏
 同年が逝きて明日は二七日思ひて拝む施食会法要

津田 美知子 岩手

音も無く沖より霧の流れ来て暑さ凌げる自然の恩恵
 運悪く雨降る中に羽化したるヒグラシが鳴く松林にて
 厚き雲に覆はれて夏の日差し無く八月なれど頻りに雨降る
 夫と吾とふらり寄りたるラーメン屋どんぶり一杯完食出来ず
 亡き母の硬貨を入れた巾着を「お守りにして」と孫達に渡す
 出来たての巢の中心に陣取りて主の蜘蛛は獲物待ちをり
 熊本地震被害の報道は遠くに居ても他人事で無し

奥山 清子 山形

庭木木の露雫する音のして去年植ゑたる姫小百合咲く
 母の日に娘より届きたるTシャツに付きあるこづちブローチにする
 ゆとりなき心にて子らを育てたる若き日思ふ娘の姿見て
 震度六東北地方に地震あり山形は三と子らには答ふ
 亡き友の息子の凜凜しき晴れ姿「移動町長室」聴く友に代りて
 吸ひ込まれロメオとジュリエットに魅了さるテレビなれどもロイヤルバレエ団の
 夫逝きて月命日の十回目朝の墓前に初の蟬聞く
 秋といふ文字に最も似合ふ花夫の植ゑし桔梗命日に咲く

松崎 みき子 岩手

天候に赤旗掲げる砂浜は震災前の冷夏思ひ出す
 盆花を畑より摘み仏壇へ座敷を通る風懐かしく
 裏山の草刈り進む機械音休めば蟬の声する真昼
 汗だくで機械を外す草刈りを盆前に夫済ませて
 墓参り夫の兄弟集まりて義母の好きな百合の花供ふ
 大船渡市場前にはサンマ船今日は出船の大安吉日

井上 鈴子 山形

はるかなる古代エジプトより伝はりて紅花は咲く山形の地で
 棘を持つ紅花摘みは夜明け前朝露ふくみ眠りゐるとき

紅花の紅にあくがるる王朝の女性を思ふ十二単衣の
をちこちの紅花を見て紅花の料理にお茶に一日甘き香

「出棺の屋根につばめが飛んでゐた」と夫は語る兄の命日

大雨つづき雨が天井に漏れてきて大工の見立ては雪崩止めからといふ
雪崩止めを外せば冬が怖いと夫言ふ夫少し下にして雨漏りが止む
雨の畑に泥跳ねのつくナス拭ひ手渡す夫の氣持受けとる

高 藤 朱 美 ☆ 茨城

種こぼれ玄関まわりに芽ぶきたるインパチェンスも雨を待ちおり
できたての梅ジュースに炭酸水猛暑の薬か甘みほのかに

十五年録画したる番組とさよならすテレビ処分の朝は複雑

新しいテレビの操作は四苦八苦脳トレ楽しみ集中続く

ブルーレイ生日に娘からのプレゼント角野隼人の世界に浸る

恙無く家族と日々を重ね居る平穏碎く一瞬の大揺れ（熊本地震）

「ありがとう」の言葉を吾にかけられて五年後逝かれしヒーリー神父

首 藤 文 江 ☆ 埼玉

小さな手の孫と遊んだ札幌を思い出して開ける「白い恋人」

夏に見る楽しみが今年はなくなりて朝顔のない一人居の家

検診の終わった後はスッキリと喉元過ぎるビールの旨さ

下校時の路上ではしゃぐ子ども達ランドセル揺れ夏休み近し

突然に東野圭吾氏亡くなりてもう読めぬかとかっかりする夏

採れたてのジャガ芋頂き調理する湯気の中にホクホク感の広がる

井 出 裕 子 静岡

庭に咲く花の名問はれ思ひ出せぬこと多くなり齒痒さ覚ゆ

忘るること多くなりたる花の名を荷札に書いて枝に留め置く

友からの義弟の訃報メール受く茶業を閉ぢてまだわづからし

鬱ぎある妹に寄り添ふと友は言ふ電車乗り継ぎしばらく通ひて

亡き人の車の友らに便乗し秋葉山訪ひし日を思ひ出す

子を膝に乗せながら絵本読む父を見ることが多し日曜の図書館

富士山の稜線なぞり山小屋の灯りが並ぶ電飾のごと

野 口 秀 子 山形

すり抜けてゆく風を受け玄関にしばしたたずむ眼を閉ぢて

岩手より娘と孫らは夫の車で高速道路をひたに走り来

新しき一年と四歳児連れてくる岩手の娘は荷物得多し

孫子らにご飯を二合炊きたるは鍋焼き用でじつくり柔し

四歳児は右足カタカタ飛び跳ねて左足は未だ飛べずもう少し

雨止みて庭前の草叢に乳白色の小さき花見つゝ竜の髯静か

散歩中の突然の電話に竹トンボの会の睦子さんの訃報聞きたり

夕暮れの青き田んぼを眺めんと近くの街を黙して通りぬく

八月号 作品三評

山本
三男

居酒屋に七人集う同窓会高齢者にて人生語る
後藤恭介☆

かつての仲間が長年の時を経て再び集まり、これまで過ごしたそれぞれの人生を語る姿が目には浮かびます。楽しく有意義な時間を過ごされたのでしょうか。

カラフルなランドセルの子らの声弾む連休明けの集団登校
今野澄子

昨今、ランドセルがカラフルになったのは、子供達の多様性を尊重する社会になったからでしょう。子供達の元気な歓声や、久しぶりに友達に会えた嬉しさが生き生きと伝わってくる作品です。連休明けというと憂鬱になりがちな大人の感覚は、子供達には無縁のようです。

亡き父の皐月の盆栽咲き初める枝振り花々面影残して
長谷川 剛

お父様を偲ぶ深い愛情と、命のつながりが美しく表現された作品です。皐月の盆栽に亡き父の面影を重ねるとする視点

が、読者の心に温かく響きます。

今宵また早苗の水田に蛙鳴く巡る季節をしみじみと聞く
松田忠一☆

筆者の住む地域では都市化が進み蛙の声を聞く事は少なくなりましたが、この作者の地域では、この季節にはこのような蛙の声を小さいころから繰り返し聞いているのでしょうか。蛙の声を聞きながら過ぎ去っていった日々への追憶に浸っている姿が目には浮かびます。

まだ呼んで貰へる孫はなくてもいい
ちやんばあちゃん我等の風貌
児珠純子

じいちゃんやばあちゃんは孫から呼ぶ言葉ですが、お年寄りの代名詞に使われることがあります。まだ孫はないのに、すでに自分達がすっかり、じいちゃんやばあちゃんの様な風貌になっているのは一抹の寂しさもあるかも知れません。お二人で同じ様な時間を重ねてきたことへの連帯感や、愛情が感じられます。

この春も二人暮らしに充分な大きな二つのマークイン採れたり
河原木光子☆

丹念に育てたマークインの収穫の喜びがストリートに伝わってくる作品です。このマークインは自分達で食べるために栽培したのでしょうか。「二人暮らしに充分な」という表現に、多くを望むことなく、充実している暮らしが表れています。

小さな手ポトルに添えて必死に飲む生きる力を私に預けて
鈴木裕子☆

小さな手を一生懸命にポトルを添えて、懸命に生きようとしている子猫の姿が鮮やかに目に浮かびます。下の句は作者に全てを預けている子猫との一体感が感じられます。

連れ添いて五十八年経つ我等あれこれ
それでおおよそ分かる
鈴木知子☆

言葉にしないで心を通じ合う、五十八年という長い年月の重みと温かい絆がよく伝わってくる作品です。「それ」や「あれ」といった日常的で少し曖昧な言葉の中に、長年連れ添った夫婦ならではの呼吸がユーモラスかつリアルに表現されています。

八月号 作品三評

橘
美千代

台風一過ハウスに走り育苗の野菜の様子確認安堵す
越澤太朗☆

「ハウスに走り」に現実味があり惹きつけられた。台風によって手塩にかけた作物が台風無しになるのは真に耐え難い。上の句の緊迫した息遣いに農家の真実な気持ち表れて読む者は心打たれる。

住む人の無き友の家手入れ良く花に囲まれひとつそりと建つ
今野澄子

空き家となってまだ間もないのであるうか。まだ荒れ始める前のかつての姿を留めている時期。その手入れの行き届いた庭に、以前は作者も訪れ友と過ごしたのであろう。「花に囲まれひとつそりと」は、柩の中に鎮まる友の姿にどこか重なるように。一首全体に寂寥が漂う。

最上川夕日を浴びて海に入る庄内平野の植田潤して
長谷川 剛

山形県と福島県の県境にある西吾妻山の「火焰の滝」を源とし県内を流れ、酒

田市の河口へと至る最上川。最上川舟唄

の歌詞にあるように。水田の広がる庄内平野を潤した後、夕日を浴びて海へと注ぐ雄大な景が浮かびくる。

つれあひを介護する友弱りたり杖つき歩む一步一步を
長澤千恵子

懸命に夫を介護する友は疲れ果て弱ってしまった。杖をつきゆっくり歩む姿に作者は驚き胸を痛める。あの生き生きと元気であった友がと。「一步一步を」に作者の励ましの気持ちが籠もるよう。

黒黒キジトラ五匹の子猫の並びいてミルク飲む何をして愛おし
鈴木裕子☆

乳飲み子の愛くるしさは人の子も子猫も同じ。一匹だけでも可愛いのに五匹も。黒や雉や虎の模様の小さい体が並んで懸命にミルクを飲む様子が目に浮かぶ。五匹みな貰い手が決まって良かった。作者の努力の賜物である。

土砂降りに中断したる夏ゴルフ晴れて天国否地獄かな
塩野 伸

あつさりと軽く詠んでおられるが、そ

の呼吸の巧みに作者の実力が滲み出ているようだ。せっかくのゴルフが土砂降りで中断に。晴れて再開、天国だと喜んでみたが生憎とこの猛暑。むしろ地獄となるかもと危ぶんで。

真夜中にスマホの光がざしつ娘は双子のミルクを作る
倉田ひろみ☆

里帰り出産の娘さんは帝王切開にて双子の赤ちゃんを授かった。お孫さんが二人生まれ大喜びと育児の大変さを歌った一連。希望と活気に溢れており一気に読ませる。双子の新生児の世話に相当大変であろう。授乳はいかに。真夜中にスマホで手元を照らして調乳する娘さん。周囲に気を遣ってなのだろう。自身大変であろうにと胸が熱くなった。育つにつれてどんどん可愛くなるので今は頑張つて下さいねとエールを送りたくなった。

連れ添いて五十八年経つ我等あれこれ
それでおおよそ分かる
鈴木知子☆

我が家とはまさに真逆である。お互いを思いやる気持があるからこそ年月を経てもこうなれたのだろう。見習いたい。

作品二

ルバイヤート・四行詩

新井 光 雄 ☆ 東京

ペルシャ語の「ルバイヤート」の仏語訳さらに邦訳迷わずに買う
「ルバイヤート」出会いは大学一年で東大前で啓文堂で

世界史で名前のみ知る本なるもどんな中身か興味惹かれる

一つ星の岩波文庫で買った本一生涯の付き合いとなる

五月病に悩む心に無遠慮な虚無と退廃これが慰め

諸訳あり英文学者の友の父フィッツジェラルド版頂きここに

「ルバイヤート」勧めることは唯一つ酒飲み給えひたすら酒を

飲む時に杯の土忘れるな若き女の骨の果てなれ

テヘランに出張の時「ルバイヤート」敬意を表しカバンの中へ

後 藤 恭 介 ☆ 茨城

図書館の学習室は人まばらゆつくり読書する夏の午後

ボケ防止にシニアの会に参加するマジックショーと楽しい会話

料理会のメニューは冷し中華なり手間暇かかりいまいちの出来

サッカーのブラジル戦の午前二時勝負の行方にドキドキとして

北海道へ元気なうちにと夫婦旅ワンナイトクルーズと道南周遊

朝日あび洞爺湖輝く窓の外新緑の丘を二人で歩く

越 澤 太 朗 ☆ 茨城

畑中の梅の老木囲む如く月見草咲く梅雨明けの夕べ

月見草一輪手折りて水差しに可憐な黄色の花涼し

幾年ぶり庭の棗は実を結び良きことあるかと秘かに思う

仏前に初採り西瓜供えつつ地震治まれと祈りを捧ぐ

猛暑中除草耕運トラクターエンジン音を確かめながら

盆ちかく鳴く鶯の名調子名残の声を独り聴きおり

今 野 澄 子 山形

剪定する夫の脚立を抑へつつあれを伐ればとわれは指図す

高齢の夫の草刈る音響き止めば窓より安否確かむ

数年間止まったままの腕時計電池換へれば忽ち動く

断捨離と決めた人形わが腕に抱けば目を閉ぢ心の残る

盆近き墓碑を擦れば義母の顔浮かびて在りし日を思ひ出す

雨上がり羽化した蝉はじつとして柔らかさうな翅透き通る

長谷川 剛 山形

八十路越え暑さの続く日々なれど負けじと鍛ふこの身生きなむ

池に沿ひ道を歩めば蓮の花梅雨空に向き清らかに咲く

例大祭熊野の御輿躍動す初穂供へて豊作願ふ

梅雨どきの里芋の葉の水玉は目玉のごとく空を見上ぐる
震度七倒れたる母屋に入りゆきて命を救ふ若者尊し
戸を繰れば網戸に蟬の止まりいて今日は広島原爆の日なり
天高く聳える熊野の大銀杏古人の思ひを秘めて

長澤 千恵子 山形

サロンにてなつかしの歌教へ受け和声響かす心一つに
熊野大社の風鈴の音聞きながら詣でる人は爽やかになる
植木さんの直売所にて売られゐる玉蜀黍は今年も旨し
早朝に野菜つみとり茄子オクラ刻んでだしにする朝餉の一品
梅雨時のみんなみん蟬は寂しげで盛夏になりて元氣な鳴き声

松田 忠一 ☆ 山形

いつの間にか昔とちがう景色見る氣候の変動如何に止めん
三年前の河川被害の竣工後再度の豪雨の憎き爪痕
菩提寺に梅雨明け前の墓掃除にわか雨降る杉木立道
梅雨開けて大輪の花火夜空こがす足早にゆくこの夏がゆく
猛暑日の雷夕立過ぎゆけば待ち遠しげに蜩の鳴く
秋立つも山際の杜蟬時雨残暑の午后の盆墓参り
受け継がるる念仏踊りの纏立つ鐘笛太鼓のしらべに乗せて

児珠 純子 山形

隣人の畑に見知らぬ木のありて問へば「延寿」と言ふ米寿の人が
床柱に成り損ねたる延寿の木斜めに伸びて葉の生ひ繁る
延寿の木に濃淡ありて杳目良くフクロフ彫らるる米沢の地で
米沢の笹野一刀彫わが家の延寿フクロフ凜としてをり
年輪を見れば五十年程になれる木か撫でて確かむ重く硬き木
延寿の木杉の木桐の木植ゑられし高度成長期の日本を思ふ
子の呉れたる金魚絵柄の一筆箋はがきに貼りて暑中見舞ひに
会へぬ友に葉書認む夏の朝川音清しく虫の音聞こゆ

河原木 光 子 ☆ 広島

三度目の大山夏山登山道むすめ伴い三人登る
初めての大山はたしか十年前あの頃息子はまだ元氣だった
下り来る青年四人とすれ違い柔軟剤の清き香のこる
汗かきて木道上る頭の中にコーラのCM曲リフレインする
足痛む吾に鎮痛剤勧めくれ塩飴手渡しくる人あり
足早に山頂めざす見罷りし二十七歳息子の姿よ
かつて子の暮らしし街の広島に新たな思い出作らんと行く
鳥の部首のよこに入と書き「にお」と読む朝の散歩に収穫のあり

鈴木 裕子 ☆ 千葉

線状降水帯なんてニュースの中だけだと思っていたがやまぬ雨音

まさか自分が被害受けると思わずに線状降水帯の雨を見ており
カミナリの轟きやまぬことよりもただ降り続く雨が怖かった
次の日も仕事はいつも通りあり雨のなかでも街は動き出す
ニュース見たという友へ返信出し終えて自分の心も落ち着いてくる
涼しくて過ごしやすいと思うのは人のみならず蝉も同じか
わたしより若い人へと飛んでゆけ車内をぶらぶら蚊の舞い飛べば

塩野 伸 山形

春霞噓止まらず鼻水に顔面歪みて会話進まず

鳥影に鳴く海猫の声のして地引網引く浜活気づく
瞬きの間に走り去る青蜥蜴見てゐるわれが気に障りしか
干柿は簾のやうに重なりて恥づかしさうに粉を纏ひぬ
ねぶたの夜に煩ひ多き跳人ゐて跳べば跳ぶほど闇に沈みぬ

倉田 ひろみ ☆ 広島

食卓にこうべを垂れて黙祷す八月六日の今朝も青空
朝五時の空に下弦の月ありて弧の縁ひとときわ白く光れり
ひかり号の隣の人の爆睡し通路へ出られぬ窓席のわれ
紫のキャリーバッグを押し歩き持ち主探す若き車掌は
夕暮れの品川駅の港南口 地図と街とを照らし合わせる
大学のサークル仲間と居酒屋で古稀の話や白髪の話

それぞれに色んなことがあったねとレモンサワーをしみじみと飲む

鈴木 知 子 ☆ 埼玉

水無月に茅の輪くぐりの機会あり無病息災ご利益願ふ
高原のニッコウキスゲ咲き誇る食害防ぐ柵に守られて
オニヤンマブルンと羽音響かせて行ったり来たり堂々と飛ぶ
クルクルと輪舞しているルリシジミ陽ざしを受けてキラリと光る
酷暑なる新語できたるこの暑さ空気が熱い大暑の今日も
暑き日に骨董市で探し物木陰の店を選んで覗く
何となく誰かと会話したくなり手帳開きて文したためる

高橋 睦 夫 ☆ 茨城

耳遠く会話ができぬ田舎の兄にハガキ十枚買いて送りぬ
卒寿前の健一兄は癌と闘う腹決めて手術に臨むと
今日もまた隣家の部屋に明かり無し門燈だけがほのかに灯る
診察時間五分の経過観察なれどドクターの声と笑顔見に来る
ミニかつ丼に十割そばの組合わせ誰の考案か旨さに脱帽す
尊敬と感謝の心を共にして仕上げの路を妻と一緒に
猛暑日初日の犠牲者はメダカたち湯となる水に命絶えたり

和田 妙子 山形

ビニールに包まれ届く新聞に配達の方の気遣ひ思ふ

「部屋干し」の予報続きて増えてゆく洗濯物にため息をつく
梅雨明けを待ちわびつつも近年の猛暑思へば心配になる
いつもなら紫色のみ咲く桔梗今年はなぜか白き花あり

大澤 幸 子 ☆ 東京

春の嵐葉桜に吹き並木道われの心をきらきらさせる
真夜中に激しい咳をする父よ我は眠れず心配づく

中国の映像を見て黄砂知る自然現象凄いなこれは
早寝する体内時計目覚めるは午前零時過ぎいつもの時間

(☆印は新仮名遣い希望者です)

村上咲枝歌集

『石鎚山』を読む

小林芳枝

「青垣」所属の著者の第一歌集。村上さんは長く保護司として犯罪を犯した人の更生の為に尽力されて来られた。青垣に入会されたのは平成元年、五十五歳というので早い方ではないが中学生の頃に石川啄木の歌に惹かれたとあるので歌と

の出会いはずいぶん早くあったようだ

喘ぎつつ攀ぢのぼりたる石鎚の峯に渦巻く霧這ひ
上る

タイトルになっているこの石鎚山は日本七霊山の一つで著者が毎朝手を合わせて一日の無事を祈っている山であり、実際に登頂して大きな感動を得た山だとあとがきに記されている。歌集を出す時には石鎚山にしたいと心に決めていた大切な山である。

焼き山に売れぬかも知れぬ杉苗を今年も峽に踏み
つけて植う

去年よりも雨多かれと願ふなり植ゑる杉苗丈の短
し

建築資材としての樹木の先が不安になってきた頃か、下句に幼い杉の木への思いが籠っている。山に苗を植えて育てようという気持が尊い。

更生の意志いきいきと少年は働き来し汗を下着で
拭ふ

自分のした事を反省して出直そうとする少年を見つめる目が優しい。どの歌も下句の写実が生きていて力がある。

昨日よりもなほ低くたるる稲の穂は黄に輝きて風
にしたがふ

真夏の日差しの中で実りゆく稲穂が丁寧に詠まれていて結句が心に残る。

歳古ればはらから恋しと言ひし日の母の寂しさ老
いて知れたり

九十二歳という著者が気付いた母の心である。この歌は歌集の最後の方にある。人の心の奥にはその年齢にならなければ分からないことが確かにある、と私なども感じていて深く頷ける。

此処に紹介した六首でどれほど伝えることが出来るか心もとないのだが巻頭の山田訓氏の序文には丁寧な著者の紹介と歌集の中から五十首の歌が抄出されており、その全てに添えられている氏の感想も味わい深く読み応えがある。

◆創業1948年、詩歌と共に78年！ 伝統と信頼の飯塚書店が出版する短歌関連書◆

【最新刊】花鳥風月の短歌 コレクション1000

日本短歌総研編著 四六判208頁 1540円(税込)



短歌様式と不即不離であった花鳥風月を「風雅」という域に留まらず、歴代の名歌はもとより、時代時代の思潮や文化の特質を反映した作品○○○首を、現代という枠組に据えて採集しました。

比喩の短歌コレクション1000

日本短歌総研編著 1540円(税込)

恋の短歌コレクション1000

日本短歌総研編著 1430円(税込)

固有名詞の短歌

日本短歌総研編著 1430円(税込)

形容詞・形容動詞の短歌

日本短歌総研編著 1430円(税込)

コレクション1000

短歌用語辞典 増補新版

日本短歌総研編著 四六上製箱入536頁4400円(税込)

短歌によく使われる用語の説明と著名歌人の作品を多数引用。他に類書のない実作者必携の辞典。見出し語二六〇四・引例歌七三四七首

【購入はお近くの書店か直接小社まで。歌集出版も承ります】

〒112-0002 東京都文京区小石川 5-16-4 図書出版 飯塚書店 TEL 03-3815-3805 FAX 03-3815-3810

大山敏夫

大友柳太郎の名は正確には「友」という字の右肩に「丿」のついた「友」を使う。だがこの文字の載る辞書、文献は無く当然印刷用活字も無い。映画での配役表記は概ね書き文字で、入れるのも容易でこれを当てるが、印刷物では使い難い事になる。最も似る字に「友」があるがこれを異体字として印刷に使った例は無い。

昭和十一年、映画界に入り新興キネマからデビューする時に芸名が「大友柳太郎」に定まったが、この「友」の文字に「丿」を添えるように提案したのは永田雅一だったという。後に大映の社長になって名を残す永田は、当時松竹から移って新興キネマの京都太秦撮影所長だった。「友」の異体字に「友」があるという見識からそう提案したのだ。ゆえに大友柳太郎は正式には「大友」と表記する。

しかし本当に「友」と同じ意味の異体字があったのか？ 異論も出てくる。活字をよく見れば分かるが、「大」に「丿」を打って「犬」や「太」にするのと見た目も少し違う。「友」の字は「跋」「鉞」

や「抜」「被」「髪」等の文字を構成する時、発音は「バツ・ハツ」となる。文字を観ると、「友」という字の右肩に「丿」が付いたのではなく、「犬」という字に「跳ね上げられた後足」を意味する「ノ」が添えられた形である。「犬」を部首とする文字で、その意味は、

○犬のはしるさま、ぬく・抜き去る。となり、その初文が「被」である事からも想像つくが、古代の祭祀に基因する文字なのだ。

○はりつけ（生贄）にされた犬です。手で生贄を捧げ、災害を「ぬきさる」からきています。

とも云われる。生贄で魂を、災禍を抜き去ることから「終」りを意味し、「跋」に通じ、「跋文」等にも使用される。ただ日本では、こうした文字を構成さ

せる場合、「丿」が省略されて「抜」「髪」の様に「友」で間に合わす事もあり同じ意味の異体字と認識されたのかもしれない。

だが複数の文字で構成される場合を除き、単独で使われる時に、「友」が「友」と同じにはならない。そもそもこれは「とも・ゆう」とする文字ではない。「友」の文字は、学術的には、

○手の形である「又」を左右に記す形で、手に手を重ねて助け合う、同格の者を意味する。（白川静著『字統』）なのだ。

大友柳太郎は、実にやっかいな芸名を与えられてしまったことになるが、本人にはそういう自覚はなく、単純に自分の名前は「大友」が正しいとしていた。書き文字としてはどの様にもなっても、印刷するには困難だった。

*本稿では組版時に細工をして、「友」の字を作り圈点「○」を付けて表した。「友」の中に「ユウ」と発音する根拠の「又」の字が無いので、一面横に挿入して作ったのである。

八月号 十首選

作品一 石渡 静夫

球形のサポテンに子のあらはれてびつしり親を囲みて溢る 小林 芳枝
山の友が教えくれにし花の名を思い出したり うぐいす神楽 齊藤トミ子☆
弱い足氣遣いながら踏みしめる田植え稲刈り 頑張れた足 松中 賀代☆
家事出来ぬ我を支える娘ありて我の幸運を日々囁みしめる 本郷 歌子☆
雨上がりつる草の猛威凄まじくツツジもボケも覆いつくさる 永光 徳子☆
椿の花いつしか終はりて濃き緑は艶やかさます昨夜の雨に 大塚 照美
不味公の三大銘菓が娘より母の日ときき食後のしむ 三好 規子
金髪に染めたる若き父親が捧げ持つごとと嬰兒を抱く 鈴木 計子
一目見て手にとるバッグのぶどう蔓娘孫へと譲りゆきたし 西村 邦子
愚痴言えば友の得意なユーモアに切り返されて思わず笑う 川上美智子☆

作品二 大塚 亮子

牛を使ひ父が水田を掻きをりし遠き故郷のわが記憶にて 岩村 知康
笹百合の芽吹きを探す笹山に蔵を摘めば両手に余る 藤田 夏見☆
赤い実は歩道に落ちて塵となる啄む鳥を待ちくたびれて 藤田 英輔☆
ミカンの木の下に白ゆりさわやかに花を咲かせてうれしい朝だ 早乙女イチ☆
杖をつきチームのバスを見送る子駅の広場に一人ボツンと 津田美知子
小母さまに貰ひて育てた花咲きぬ写メール一枚持ちて訪ねむ 野口 秀子
就職の決まる男孫に九十五歳祝ひの心渡すは嬉し 児玉 孝子☆
ことんと新聞配る音のして出づれば夜明け朧月浮く 奥山 清子
兄の孫を誘ひて食ぶる焼肉はこれが最後と密かに思ふ 井上 鈴子
「笑点」のテーマソング」を聞く夕べ職場の腹立ち小さくなりゆく 金子八重子☆

作品三 天野 克彦

日常の心情詠める歌数多小さな気づき大切にせん 後藤 恭介☆
風ありて万物育つと思ひおり自然の恵みに感謝忘れず 越澤 太朗☆
懐かしきラーメン店は満席にて手書きの品書きあの時のまま 今野 澄子
最上川夕日を浴びて海に入る庄内平野の植田潤して 長谷川 剛
蔵王山の御釜を望む晴れの日に熊すずつけて御朱印貰ふ 長澤千恵子
今宵また早苗の水田に蛙鳴く巡る季節をしまじみと聞く 松田 忠一☆
よく見れば夫の眉毛伸び放題つまんで計れば四センチあり 児珠 純子
この春も二人暮らしに充分な大ざる二つのメーカーイン採れたり 河原木光子☆
胡蝶蘭の白き蕾はゆつくりとふくらむ赤子のほっぺのように 倉田ひろみ☆
連れ添いて五十八年経つ我等あれこれそれでおおよそ分かる 鈴木 知子☆

■安富康男歌集

『春夏秋冬のうた』

令和七年十二月十五日発行の第五歌集、三六五首を収めている。動植物名は漢字にカタカナのルビ、この表記の意味はあとがきに詳しく書いてある。

諸処を歩き、何気なく詠ったような歌に今どきの街の様子など伝わるほか、何故か懐かしく時の流れを感じる作品を挙げてみた。

行田市を古墳通りに道行けば旧き誇りの武蔵野銀行

春の陽を溜めて佐倉の武家屋敷くらやみ坂に風吹き寄せる

雲間から夏の走りの陽を浴びて米沢駅は白く霞めり

華やいで巣鴨七夕ささ祭りミストシャワーに客波は満つ

野分たち雨降り頻る造園に怪しく伸びる麻布台ヒルズ

秋の日にインバウンドの人溢れ場外市場

に声は華やぐ

暮迫る東京駅のあんバター屋キャリーバッグの客波寄せる

歳末は新仲見世のアーケードインバウンドの人溢れくる

寒風に黒いタイツの遅しき雷門に人力車ゆく

冬の日も墨田の街を見下ろして勝海舟像厳かにたつ

(歌と観照叢書第315篇 いりの舎刊)

■生田澄江歌集

『メサイアと車椅子』

令和八年四月二十五日発行の第三歌集で三八八首を収める。二〇一七年から二六年までの歌で、この間のコロナは、活動分野の広い著者には苦痛だったと感じられる。合唱団ソプラノでの活動や歴史研究者らしい地域活動、歴史学者の夫の病とのたたかい、これらの柱の間に夫との楽しかった外国旅行の記憶が漂っている。「滄」所属。

近辺の景色にも知識が加わる。

石神井川の水源をうばひ合ふ中世の戦場

たりしわが町

セロテープ発祥の地なりしニチパンの工場跡の低き雨雲

(サンシャインシティでは)あしかしヨーに和める母子よ知らでよし

「巣鴨ブリズン」ここに在りしこと練馬区ふるさと文化館で奉仕。

幕末の練馬の資料に見入るひと数歩離れて控へあるわれは

伝承と史実の間をさ迷へる問ひに対してわれらは何を

合唱団。人道支援にもつながっている。妹の急死も知らず誰がためのミサ曲かわれはライトを浴びて

発声の仕上げよければまづまづのラ音の出でぬソプラノわれは

少しおかしく、なんだか深く、実感こもる数首。

広重の浮世絵の構図残りたるスポットのありわれのみはしやぐ

館長の口からふと出づるわれも会員なりし日の「日蘭学会」

介護サービス出入り多かる明け暮れに沈思黙考夢のまた夢

(短歌研究社刊)

編集後記



▽高橋輝次氏のコラムを今回も興味深く読ませていただきました。作家にとって机は作品を書き上げるために大事なものだと思います。文学仲間の友情や師弟愛から譲られた机の話は、ここに紹介されているだけでも面白く印象的です。心の世界が広がるようなコラムを誌面に届けていただきありがとうございます。

▽巻頭に御報告の通り、PDF版『冬雷』を国会図書館デジタルコレクションに入れていただけることになりました。公的機関に電子書籍として認めていただけたのは嬉しいことでした。インターネットを通して世の多くの読者に『冬雷』を知ってもらえることと思います。

▽今年は誌上大会となりますが皆様個性ある作品に出会えることを楽しみにしています。充実した大会にしましょう。

(桜井美保子)

▽今月は新作五首を林田恒浩氏より頂戴しました。「星雲」代表として、日本短歌雑誌連盟理事長としても活躍です。歌は、終戦直後の樺太よりの緊急帰還の辛い体験を回想したものです。

▽高橋輝次氏のコラムは作家と机の話(『書斎の宇宙』から)という我々歌作りにも身近な話です。この著書、売れ脚が鈍かったとあるものの初版八千部売切れ絶版とのこと。短歌関係の者から見れば凄惨な部数です。小誌のような片々たる短歌雑誌に載るようなコラムではない連載六回、快く書いてくださったこと感謝です。

▽本号のトップに、小誌の電子書籍化の流れの具体的な進捗情報を担当者を書いて貰いました。こうして刻々動く新しい時代への対応、気持が引き締まります。歌壇は、急激に隔月刊化に転じて居ます。隔月刊がスタンダードになれば、それも一つの選択肢ですが、小誌は慎重に見守り、会員の皆様のご意見に添いながら方向を定めます。

(大山敏夫)

▽今月の応接室にお出で下さった林田恒浩氏は昭和一九年の会で長く御一緒させて戴いている。敗戦でロシア領になってしまった出生の地を思う気持は八十年過ぎても軽くなることはなく恋しさが募る。

▽毎月楽しみにしている高橋輝次氏の『作家と机の話』から随分昔に見た正岡子規の机を思い出した。子規庵の窓辺に置かれていた机は病で伸びなくなった左足を収めて安定させる為に一部が切り抜かれていた。亡くなる二日前まで其処で随筆を書いていたという姿を思いながら何故か悲しくなってきた記憶がある。作品を生み出す環境にも用具にもそれを使う人との密接な相性があるのだろう。

▽大友柳太郎『渚』鑑賞補記⑦にある(友)という漢字についての解説を読みながら、異体文字以外に旧字体・新字体などもある日本の漢字の難しき奥深さを改めて感じている。

▽再入会

大澤幸子

(小林芳枝)

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額(購読料を含む)次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。

*会費は原則として振替にて納入する事。

- A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
 - B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
 - C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
 - D 維持会員(二部購入) 二六〇〇〇円
 - E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。

冬雷集・作品三欄(メール投稿分)

- 作品一欄 ・担当 大山 敏夫
- 作品二欄・作品三欄(手書き投稿分) ・担当 桜井美保子
- ・担当 小林 芳枝

- 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
- 一、無料で添削に依じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。

《Eメールでの投稿案内》

- 白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
- 一、Eメールによる投稿は左記で対応する。
- 大山 敏夫 tourai-oyama@nifty.com
 - 小林 芳枝 kysie@nifty.com
 - 桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2026 年 10 月 1 日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 090-2565-2263
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ <http://www.tourai.jp>



小誌 QR コードです。
ここから入れます。

頒 価 700 円

今月の冬雷 (冬雷カウンター) 出詠者数の動向

冬雷集欄	作品一欄	作品二欄	作品三欄	総数
32	31	27	16	106
(+1)	(0)	(-1)	(+1)	(+1)

* 上記は対前月比です。これは即ち、現冬雷の体力数値と言えます。